
燃え尽きた翼は宇宙へ駆け上がる夢を見るか

poorman's gold

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

燃え尽きた翼は宇宙へ駆け上がる夢を見るか

【Nコード】

N7064X

【作者名】

poorman's gold

【あらすじ】

メサイア攻防戦、シン・アス力駆るデステニーとキラ・ヤマト駆るストライクフリーダムは、誇りと信念をかけた激闘の末に相打ち、レクイエムの光と消えた。

しかし彼らは死んではいなかった。

流れ着いた別の世界、ISというマルチスーツが普及する女尊男卑の世界で彼らは何を見るのか……。

この作品は、同筆者による『例えばこんな世界の決着』の続

編になります。

小説情報（筆者の逃げ場）（前書き）

筆者はド素人のため、たびたび作中の文章を訂正したりすると思います。

またこの作品には独自の解釈が多く含まれます。

そのためそれらの情報をまとめるページを用意させていただきました。

物書きとしてそれは逃げにあたりと理解してはいますが、なにぶん初心者なのでご容赦ください。

小説情報（筆者の逃げ場）

独自解釈・独自展開

第一章時点にて

・IS学園

世界各国で入試が行われているが、教育機関や訓練機関としての練度は極めて低い。

女子のリボンに対し、男子はネクタイ着用が義務。

・IS

訓練機も初期化最適化をすれば一次移行して専用気になる。
量子化できる物は武器に限らない。

教室などでISを起動すると反省文を書かねばならない。
BT兵器の操作性についてあれこれ。

・個人

織斑千冬は教職免許を持っていない。

一夏は若干自発的に予習をさぼっていた。

・時系列

クラス代表に関する話が初登校日にある。

・その他

第一回モンド・グロッソは試験的、ISのお披露目的な意味が強かった。

訂正情報

10 / 2

第二話にて、クラス対抗戦の日程が『一月後』だったのを、『再来週』に訂正しました。

同、アスカがいじっている物を『ロボットアーム』から『何かの機械』に。

12 / 7

第四話にて、雪片式型と零落白夜に関する認識を改め、とどめのシーンに一部追加しました。

第一話 まず決める（前書き）

三人称視点になります。主人公は今のところ・・・。

第一話 まず決める

「うん、忘れ物はないね」

時計を見た男はそう呟き、鳴る前のアラームを止めた。改めて予定の時間を確認する、今ここを出ればちょうどいいだろう。

ありふれた安ホテルの一室で、彼は荷造りをしていた。もちろん今日でここを引き払うからだ。たいして量が無いことを喜ぶべきか悲しむべきか、荷物の軽さに首を傾げながら椅子から腰をあげる。とりあえず悲しむべきという選択肢がある時点で、彼がここに愛着を持ち始めているのは間違いないだろう。

こことはもちろんこの一月ほどでコロコロ乗り換えてきたホテルの一室のことではない。この世界のことだ。

「さ、行こうか」

キラ・ヤマトは荷物を担ぎ、誰にともなく呟いた。

キラ・ヤマト、彼がこの世界に来たのは約一年前のことだ。共鳴した二対のヴォワチュール・リュミエール光圧推進ユニットは、レクイエムの光を推力にして圧倒的な加速で彼の意識を刈り取った。目が覚めて、絡み合ったままの二機が墜落したのが地球だとわかったときは、がらにも無く神に感謝したりした彼だったが、すぐに困ったことに気付いた。まず一つ目は現在地が地球のどこだかわからないこと。二つ目はストライクフリーダムがともに動きそうに無いこと。三つ目は……、月にレクイエムの傷痕も、アルザツヘル基地も無いこと。

混乱して、ひとしきり喚いて、叫んでみた彼は一つ重大なことに気付いた。デステイニーのкокピットが開かない。自分の敵である、ムウ＝ラ＝フラガの仇である人間が出てこない。

死んでいれば万々歳……、とは思えなかった。その人間が死んでしまっていたなら、キラは今この広く見知らぬ世界で一人ぼっちだったからだ。あわててデステイニーのコクピットに駆け上がった彼は、たたき付けるような勢いでハッチ解放ボタンを押して、中を覗きこんだ。

フリーダムと違いデステイニーはまだ生きていた。瀕死だ。ディスプレイの八割はERRORとWARNING、DANGERの赤で埋め尽くされている。残りの二割はLOSTの黒と……、データベースだ。それは星図と月軌道の照合をしていた。ついさっきまで、いや、現在進行形でデステイニーは操作されている。

ぐったりした少年が、ダブダブのノーマルスーツを来た少年が、手だけひたすらキーボードを叩いていた。

ピーッ ピーッ ピーッ

ブザーが鳴る。正面のディスプレイに表示されたのは地図と、現在の座標と、そしてミラージュコロイド粒子散布準備完了の文字。承認して、それを最後に少年は動かなくなった。キラは途方にくれた。

電車の中、窓ガラスに映る自身の姿にキラは居住まいを正した。ちつとも変なところは無いしむしろ似合っているのだが、何故かおかしなコスプレをしているような気分になってしまっただ。しかしまあそれは仕方ないことかもしれない、2いや3年前の時点ですでに工業カレッジの学生だったのに今更ハイスクールの袖を通しているのだから。

たとえ見た目が変で無くても、気持ちの上ではどうしようもないことだったのだろう。

だが我慢しなくてはいけない。これでとりあえず三年間生活が保証される、三年の時間が稼げるのだ。そう自分自身に言い聞かせな

がらもつ一度窓を見た彼は、ネクタイが曲がってないか不安になったのか首元を弄りはじめた。

……年齢はともかく、落ち着きのなさは間違いなく高校生のそれだった。

自分達がいるのは過去に近いらしい。ヒッチハイクをなんとか成功させ、街にたどり着いたキラは一週間かけてそう結論づけたが、かけた時間の割には全く実にならない情報だった。ついで既に彼達の世界には無い流れがあった、つまりコールドスリープすれば戻れるというわけでも無い。……らしい。

もつとも帰る方法は漠然とわかっている。しかし突き詰める方法が無い。困ったキラはとりあえず働いてお金を稼ぐことにした。容姿がいいとこういうとき便利だ、とは本人の言葉だが、無一文どころか戸籍も無いにもかかわらずなんとかかんとか働かせてくれる場所があった。最初は日雇いで転々とし、パソコンを借りて能力をアピール。一ヶ月でまともな仕事にありついた。……世の中なめてるとしか思えない能力だ、どこのシンデレラなのかと筆者は問いたい。ときには失敗もし、ときには褒められ、友人もでき、たまには過去を懐かしんだり。働くということ、人の間で生きることの大変さを思い知りながらも、それなりに満足で、帰れなくてもいいかもしれない……、キラがそう思いはじめた頃、彼等は一つの事件に巻き込まれた。

電車から下りて、キラが最初に感じたのは無遠慮な視線だった。慣れ親しんだ見慣れない制服が気を引くのだろうか？ そうなのだろう。普段意識していなくても、人は以外と見て覚えている。

ますます落ち着かなくなりながら、ひたすら歩く。全寮制の学校なせいか、彼の他に同じ制服はほとんどいないし、いたらいたで驚いたように足を止めて彼を見る。

（入学式、さぼっていいかなあ……、だめだよな）

彼、基本的に優等生として生きてきたので、若干そういうのに慣れていたりしないこともない。が、今回はそれを差し引いたとしても、ついついそんなことを考えてしまうのも致し方ない状況だろう。勿論しなかったから優等生だったのではなく、できなかったから優等生なのだが。

そもそも彼にそんな余裕はない、もう一人とは違い彼はおまけなのだ。それなりに価値はあってもあくまでおまけ。あまり馬鹿なことをすれば即退学させられてもおかしくない。諦めのため息をつけば、目の前には既に校門がどっしりと構えている。

「新入生の方はこちらです」

小さい声を目一杯張り上げながら、女性が一人せわしく動いていた。持っている紙束と呼び止めた生徒を見比べては、なにやら指示をしているらしい。新入生の案内のようだ。じゃっかんぼやんとした目つきや雰囲気とは裏腹に、目だけは鋭く学生の胸元……、ネクタイの色をチェックしていた。この学校の制服は、ネクタイで学年を見分けることができる。

ハタと、女性はキラに気付いた。

首を傾げた。

「キラです。キラ・ヤマト・ヒビキ」

「ああ、ヒビキさんの方の」

なるほどなるほど。そんな無言の相槌を持って頷いている彼女に、キラは若干不安を覚えた。まさかあのニュースを見てないんだろうか？ 見ていればすぐに見分けがつくと思うんだけど、と。

「それで」

「ああ、ヒビキ君は一年一組になります。教室はわかりますか？」

「え、入学式は」

「ありませんよ？ あれ、入学案内は」

学校というシステムをとって日が浅いためか、別の思惑があるのか、とにかくこの学園には入学式が無い。ちゃんと新入生案内にも書いてあったのだが、彼は配布された必読テキストを読み込むのに必死で、最初の登校日の確認以来ほとんど読んでいなかった。

「いえ。わかりました、ありがとうございます」

キラは再びため息をつきながら校舎に足を向けた。一応、一度見学に来たので教室の場所は覚えていた。ただその足取りはひたすら重かった。敷地内に入ってしまったえばそこに学生がいる、教室までの間ひたすら見られることに堪えるのは、おそらく誰にとっても苦痛だろう。

教室にたどり着く。ホテルを出る時間を調節してギリギリを狙ったのが功を奏したのか、はたまた教室が意外と近かったのか、数える程度しか生徒には会わなかったが、それでもなかなか辛い。というのがキラの本音だった。これで教室に入ればどんなものだろうか？ 少なくとも両手の指より人数が多いことは間違いないだろう。

「三年間自由、三年間自由、三年間自由、三年間自由……」

なにやら唱えはじめた。なにかの儀式なのかあるいは決意の再確認か、教室の扉の前でひたすらそうつぶやく様はまるで変質者である。本人至って真面目なのだが。……フリーダムはあっさり受け取ったくせに。

「あの、ヒビキ君」

「三年間じゅ……、はい？」

「あ、急に声かけてごめんね、でももうすぐチャイムが鳴るの。S H Rのために私も教室に入りたいし、そろそろ教室に入って欲しいかな？ って、あ、もう入るところだったんだよね、ごめんね」

「あ、ああ今入ります」

ガラリと音を発ててドアが開く。教室中の視線が一斉に扉を開けた人間に注がれる。半秒たらずで、その人間が纏う服が白地に赤のラインが入った特有のモノ——制服——であることを確認、再び今

まで見ていたモノに視線を戻して、

「……え？」

再び視線は扉を開けた人間に集まった。ご丁寧にも疑問符の唱和付き。心の中では悲鳴をあげつつも、キラは何も無かったかのように1番後ろに配置された己の席に向かう。例えその間誰にどんなふうに見られようともだ。

「皆さん入学おめでとう！ 私は……」

キラのすぐあとに入ってきた教師が壇上で挨拶するも、誰一人彼女を見ていない。キラですら、前を向いて誰かと目が合うのが怖いので俯いていた。

「え、ええと、今日から皆さんはこの学園の生徒です」

それでも勤めを果たそうとする教師の健気さにせめて自分だけでも、と思い顔をあげかけたキラは即座に俯いた。全方向から注がれるそれもさることながら、正面最前列から一際強く己を貫く一対の光。誰にでも見て取れるだろう懇願、助けを求める色。俯いて目を反らしたキラは心の中で叫ぶ。いや、むしろ僕を助けて。

「この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です」

今まさに、視線と教師の言葉の一つ一つが、キラの心中の天秤にかけられた『三年間自由』という言葉をしーそーの要領で弾き出すとしていた。

「仲良く助け合って、楽しい三年間にしましょうね！」

教師も必死だ。空気の悪さにもめげずに、語尾をわずかに強くこれでどうだと言わんばかりの顔で言葉を紡ぐ。若干涙目。辛うじて笑顔を作る口元が痛ましい。それは一教師として立派な姿なのだが、相変わらず誰ひとり気にしていない。

どこからかなにか折れるような音がした。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。……出席番号順で」

マニュアル通りの進行ではあるが、心持ち、もうなるようになれ……。という思いがすけていた。煤けた女教師の涙に乾杯。ともあれ女生徒達が心待ちにしていた自己紹介という名のアピールタイム

が始まる。誰も彼もが……、彼女もが？ 目をぎらつかせ互いを牽制しながら、言葉一つ一つがどのような反応を引き出すかを見ている。

そんな彼女達の視線のプレッシャーに耐え兼ねたもう一人、キラにまで目を反らされ困窮極まった彼は、先ほど見かけた幼なじみに最後の望みをかけ……、そしてあっさり拒絶された。

泣きつ面に蜂、弱り目に祟り目。覚悟する間もなく訪れていた自己紹介の順番。

「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

彼は全く何の用意もできていなかった。だからこそその木訥な言葉、必然、なんのフィルターもなく視線が集まる。このプレッシャーを自力で打破できる、最初で最後のチャンスだろう。

キラも自分の番に備えて彼を注視していた。だから、

「以上です」

そう締めくくられた自己紹介に、彼を含めて教室にいたほとんど全員が脱力した。これがわざとならば、彼は意外と策士なのかもしれない。

キラはただため息をついた。

まず決める、そしてやり通す。それが物事を成す唯一の方法。でも、

「クーリング・オフはきくのかな、ラクス」

やっぱり『IS学園に入る』は早まったかもしれない。出席簿で叩かれる織斑一夏をみて、キラはつくづくそう思った。

スパンッ

いい音がした。ただの出席簿のようだ。音もなく教室に入り、いつのまにか織斑一夏の背後に立っていたスーツの女性が、片手の出席簿をひらひらさせながら彼を睨んでいた。何がおきたのかわからない、という顔で彼はその名を呼ぶ。

「ち、千冬姉」

「学校では織斑先生だバカモノ」

もう一発叩かれた。ただの姉弟のようだ。いまだき体罰だ何だと騒がれそうなものだが、誰も気にしないんだろうか？

「諸君、私が担任の織斑千冬だ」

さっきまで教壇に立っていた女性、山田真耶とわずかなやり取りの後、彼女に代わって教壇にたった女性はそう自己紹介した。元々いた山田真耶が副担任だと認識していた生徒はどれほどいたのだろうか？ 一様に首を傾げている。

「君達を一年で使い物になるように育てるのが私の仕事だ。逆らってもいいが私の言うことは聞け、いいな」

その言葉でようやく現状を正しく理解した女生徒達の感情が爆発した。『千冬様、本物の千冬様よ！』『素敵』などとはとにかく、『お姉様のためなら死ねます！』とはどういうことなのか、本人も若干呆れた様子だ。

「毎年よくもこれだけバカが集まるものだ、感心させられる。それとも私のクラスにだけ集めているのか？」

いや、むしろ呆れを通り越して鬱陶しい、と顔には書いてあるのだが、普段からそんな顔なのでわかる者は殆どいないだろう。あるいはそれも一つのスパイスなのか、とにかくにも全く悲鳴は納まる気配を見せない。

「もつと叱って罵って！」

「でもときには優しくして！」

「そしてつけ上がらないように躑躅して〜！」

はあ。とため息を一つ。

「それで、挨拶も満足にできんのかおまえは」

「ち、千冬姉、俺は」

ゴッ、と音がして織斑一夏は机とキスする羽目になった。織斑千冬の手がその頭に乗っている。

「織斑『先生』と呼べ」

「はい……、織斑『せんせい』」

「よろしい」

一夏が頭を起こす。

苗字から気づいても良さそうなものだが、生徒たちは今更のように織斑一夏と織斑千冬の関係について話しはじめた。求めるのはお姉様か女王様か、どんなポジショニングを期待しているのかしれないが、『変わってほしい』はないだろうに……。

「静かに！」

一喝。それだけで魔法のようにクラスが静かになった。クラス中の視線が壇上に戻る。

「よろしい、では自己紹介に戻れ。カリキュラムの説明があるので、時間が無い」

クラスの半ば、回ってきた順番。

キラはクラスメイト達の視線が己に集まるのを感じていた。若干だがプレッシャーと言っても差し支えないそれは、それでも織斑一夏が感じていたものよりはマシだろう、と思う。

キラの場合は一緒に見られてくれる相棒がいた。

「こんにちは、僕はキラ・ヤマト・ヒビキ、アメリカに住んでいましたが、この子の付き添いでIS学園に来ました。双子のアスカ・シン・ヒビキです」

立たせた『妹』の頭を押さえてお辞儀をさせながら、キラはそう言った。お辞儀からあげたアスカの顔を見て、女生徒達がうつと息を詰まらせる。虚ろでどこにも焦点を結んでいない、まるで死んだような目だったから。

それでも静なのは、教師の一喝が未だに効いているのだろうか。

キラはアスカを座らせ、再び口を開く。

「見てのとおり問題のある子で、この子が起動したISを代わりに操縦したり、日常の世話をするのが僕の役目です。まずは一年よろしく願います」

終いの言葉に今度こそざわめきがはしる。が、
「質問は後だ。次！」

鶴の一声で鎮まった。次の生徒が立ち上がるのを見て、キラはホ

ツとため息を着いた。

（女装、ばれてない）

もちろんキラにはアスカ・シン・ヒビキ等という妹はいない。彼女は、いや彼は女装したシン・アスカその人だ。

デステイニーから引きずり出したシン・アスカの小ささに驚いたキラだったが、すぐに彼の異常に気づいた。何故か彼は戦闘時の覚醒状態——キラの知人はそれをSEEDと呼んでいた——から帰ってこなかったのだ。そしてそれはキラの知るそれとは大分違うものようだった。

外部からの刺激に殆ど反応が無く、自主的な行動もしない、まるでシンは機械のようになっていた。

それでも『コズミック・イラ』の唯一の証であるシンを手放せなかったキラは、彼を養いながらアメリカで過ごし、やがてシンがISを起動できるらしいこと、彼が起動したISを操縦できることを知る。

シンには自衛能力がなかった、またコミュニケーション能力も殆ど無い、捕まって研究所行き……、そんな単語がキラの脳内を駆け巡る。悩んだキラは信頼できる友人と相談し、シンを女装させIS学園に放り込むことにした。女装させたのは、その特異性を少しでも隠すためだった。

ちなみに入学願書の性別欄には男と書いておいたが、キラが「それ僕が書いたんです」と言ったら受付の人が勝手に訂正してくれた。キラは嘘はついてない。ホントのことを言っていないだけで。

最初の一月でISの基礎は全部やるぞーとか、私の言葉には良く

ても良くななくても返事をしろーとか、それカリキュラムですか？
と言いたくなるような言葉を聞き流しながら、キラはもう一度ため息をついた。

改めて思い直せばいらないリスクを背負っているのは明白だ。せめて今日シンに男子の制服を着せるべきだったか、とかいまさら考えても仕様のないことを取り留めもなく考えている。せめての救いは見合うだけの、あるいはそれ以上のリスクを回避できているはず、ということか。

「それではS H Rは終わりだ。次の授業に備えるように」
キラがただ思考を巡らせているうちに、誰もが待っていた時間が始まった。

「ヤマトだったっけ、俺織斑一夏だ。よろしくな」

休み時間に入るなり、彼は一直線にキラの元へ行った。少し遠くで幼なじみが彼に話しかける為の覚悟をしていることなど知るよしもない。

「織斑君だよ、キラでいいよ。テレビで知ってはいたけど、僕ら意外に男の子がいて正直ほっとしてるんだ」

「俺も一夏でいいぜ。でもなんで俺のことはテレビでやってたのに、キラのことはやってなかったんだ？」

「さあ？ 自力で起動出来ないからじゃない？」

実際には誰も彼もが一夏に掛かり切りになったため、キラとシンの情報が良くわかっていない人達の間で処理された、という経緯がある。男子一人だと予算的にあれだから入れちゃおう、とか。起動できないだけで操縦ができるのは当たり前なのかな、とか。ばれてたらいろいろ面倒だったろう。学園の人間すら、彼の入学に関する処理に追われて七転八倒し、キラのことに気づいたのはつい一週間ほど前だったりする。

「そうなのか」

「うん。僕が独力で起動できるのは今のところこれだけ」

キラがそういつて取り出したのは、胸元にかかっていた鎖の先の指輪だった。白と黒、デザインは全く同じだが、白いものはかつて歌姫に渡されたもの、そして黒いものがIS、一次移行を終えたラファール・リヴァイヴだ。

「ISって……、これが？」

「専用機は本体を量子化できるからね。……一夏ちゃんと予習した？」

「いや、実はテキストを古い電話帳と間違えて捨てちまって」

「分かっているなら再発行頼めばいいのに」

「う、まあそうなんだが……、け、けどすごいよな！ 専用機持ちなんて！」

「代表候補生の人とかと違って、ここにいる間だけだね」

「代表……、ん？」

一夏の肩を誰かがたたいた。

「少しいいか、一夏」

女子にしては長身、高いところで縛り二本になって流れている長い髪、一夏が一度助けを求めた相手、幼なじみの篠ノ之箒その人だ。ようやく話しかける決心が付いたらしい。

「ん、おう」

返事を聞くなり彼女は廊下に向かって歩きだした。あわてて一夏がその後を追う。

「んじゃ、またあとでな、キラ」

「うん、またあとで」

軽く頭を下げて行ってしまいう一夏に手をふって、キラは正面に向き直った。一人になった獲物を狙う狩人の気配を感じていた。

（とりあえず、ヒビキって呼ばれたらキラかヤマトって呼んでもらおう。うん）

第一話 まず決める（後書き）

シンの活躍を期待していたかた、申し訳ありません。もうしばらく
出番は・・・。

第一話・ ヒビキって思いの外馴染まない（前書き）

多分こちらの方が薄くておちゃらけてます。

第一話　ヒビキって思いの外馴染まない

「よし、時間もいいし……」

時間の最終確認。道にさえ迷わなければ、8時25分ギリギリに目的地につけるだろう。

「行くよ、シン」

一日世話になった安ホテルを引き払い、荷物を担ぎ町に出た。駅まで5分、電車で30分、そこから徒歩で10分だ。定刻通りにきた電車には幸い二人分席が空いていた。座って正面を見ると窓ガラスに映る自分の顔、見てもおもしろくないのだがなぜかチラチラ見してしまう。この歳になってここまで落ち着きがないのは……、とは思うけれどもしょうがない。この歳でハイスクールの制服に袖を通すのがおかしいのだし。

電車を降りると道ゆく人がチラチラこちらを見ている。見慣れないよく知った制服に驚いているのだろう、改造自由等と聞いているが、流石にズボンをはいてる人はいないのだろうか？ 学校の敷地内でようやく同じ制服の子を見かけた。やっぱりチラチラこっちを見ている。疲れてきた。

「おはよう」

挨拶しながら教室に入ると二度見された。あ、一人だけズボンの子がいる……、彼がかの有名な織斑一夏だよね？ 残念なことに既に疲れ果ててるようで机に突っ伏していた。こちらに気づく気配はない、声をかけようとも思っただけど、チャイムが鳴りはじめたので席を探す……、1番後ろだ。シンは隣。席につくと同時くらいに教師らしき女性が来てチャイムが止まる。ピツタリだった。

「織斑一夏です……、以上」

「千冬姉」

「バカモノ、織斑先生だ」

「貴様らを使い物にするのが仕事だ」

「キヤー、千冬さまあ！」

「でもときには優しくしてえ」

ハイスクールに入って自己紹介ってなんだかなあと思うけど、そうかと言ってその自己紹介はどうなんだろう？　それが織斑一夏君に対する第一印象だった。流石に苦笑いがこぼれる。や、でも仮にも教師が後ろから忍び寄って出席簿で叩くのはどうなんですか？

呼び方も相まってコントにしか見えません。ていうか間違いなくクラスメイト参加型のコントだよなこれ。君らにとって大事なのは男子なのかお姉様なのかどっちだ？　どっちでもいいけど織斑君なら両方つくから僕のことは忘れてくれ。

一瞬お流れになるかと思ったけど、順番はしっかり僕まで回ってきた。

「皆さんはじめまして。僕はキラ・ヤマト・ヒビキ。つい先日までアメリカにいました。一応織斑君と同じ男性のIS操縦者となります」

軽く会釈をする。やっぱり周囲からの視線が痛い、もっとも織斑君とは違って、その半分は僕自身ではなく僕が立たせたもう一人に向いているのが幸いだろうか？　そんなことを思いながら彼の頭に手を載せる。

「そしてこの子がシン・アスカ・ヒビキ、見てのとおり問題がある子ですが、皆さんと同じようにISを起動できます。事情があつて世間知らずな所もありますが、彼女共々よろしくお願いします」

彼女。うん、まあね。特異さは隠すべきものだし。まともに抵抗しないのをいいことに、女装させようって言ったの誰だっけ？　…僕しかないのか。

促されるままに会釈したシンを見て、何人かの女生徒が息を飲んだ。無理も無い、シンの目は焦点が無く濁りきっているからね。一年前からずっとこうだけ。

レクイエムを受けて推進力に変えたヴォワチュール・リュミエールの殺人的な加速に意識を刈られ、気が付けばそこは地球だった。しかも月にはレクイエムの爪痕はおるか、連合のアイザツヘル基地すらない異世界の地球だ。コクピットから這い出して、星図、気温、月齢等からどうやら現在地はアメリカらしいと割り出せたときにはほっとしたけど、同時に月のそれに気づいてしまった自分の目のよさと観察力を呪いたい。まあ、外宇宙の地球そっくりな別の惑星、なんてことが無いわけではないけど、とにかく地球だった。

しかも体が縮んでいた。ウラシマ効果がいきすぎたのだろうか？それに気づいたのは大分後だったけど、もう怖いものなんて無いと思ったのを覚えている。

とにかくしばらく混乱して、喚いてみて、落ち着いたらデステイニーのコクピットハッチを開いた。あそこで落ち着かなかつたらシンのことに気付かなかつたかもしれない。今思うとぞっとする。幸いシンを発見した僕は、既に壊れていたシンを連れて行くことにした。一人ぼっちは寂しかったからだ。

デステイニーとフリーダムは埋めて、ついでにミラージュコロイドをかけた。おそらく誰にも見つからないだろう。

そのあとしばらくはお金を稼いだり、世界のことを勉強したり、シンを護るためだと言い訳をしながら、人に言え無いようなこともした。そうこうしてるうちに事故があり、紆余曲折を経て日本にわたり、僕はシンをIS学園の入学式にほうり込んだ。時間が必要だった。女装がばれるかもと戦々恐々だったが、他に闖入者がいたらしく全然問題なかった。らしくも無く神に感謝したりした。

とにかく時間が必要だったのだ。

そのためのIS学園、選択肢としては間違いじゃなかったはずだけど……、

「男子が二人も！」

「アメジストみたい!!」

「耳元で甘く囁かれない！」

「なかなかいい筋肉……、じゅる」

女子達の叫びを聞いてるといろいろ間違えてしまった気がしてきた。

若干頭痛をおぼえ、額に手をやり軽いため息をつく。それだけで黄色い悲鳴は三割増しくらいになった。もう席に着いていいだろうか？

スパンツ

物理的に頭痛が増した。

「織斑先生？」

「たかが自己紹介とは言え、虚偽申告は見逃せんな。これから三年間共に過ごす仲間に対しては特に」

出席簿で頭を叩かれる。虚偽……、そう言えないこともないこと、シンの持つ特異性と自分自身の立場。まあ指摘されたならしょうがない。いつの間にか座ってた彼はほって置いて、訂正を口にする。

「指摘があつたので訂正しますね。僕は織斑君とは違って普通はISを起動できません」

教室に黄色い悲鳴がざわめきにかわつた。

そう。ISは女性にしか起動できない。ハッキングでもしたらどうだかわからないけど、少なくとも触っただけじゃ起動できない。

それはこの世界のルールだけど、異世界人の僕には適応された。ここまでではいい、問題はシンだ。

「そのかわりシンが起動したISを操縦できます。この子は触れずにISを起動でき、なんの設備もなくISの初期化最適化を行えます」

これは、シンが起動したISに触れたらそのISが僕専用的一次

移行した、という事実から推測されることだ。今のところ調査中。
なお所用時間は一分弱。まるごと事実なら危険過ぎる技能だと思う。
「これが」

首元からチェーンを引き出す。そこにはかつて歌姫にもらった物
ともう一つ指輪が通してある。

「シンが僕専用的一次移行させた入試用のラファール・リヴァイヴ
です」

ラファール・リヴァイヴ一次移行。いまのところこれだけは僕が
一人でも起動できる。まだシンが触れないでISの起動を出来ると
知ったばかりで、そのうえそれを自分が扱えるというだけでも途方
もない話で、それ以上があるなんて想像もできなくて、今思えば焦
つてた僕はシンの付き添いとしてIS学園の入試会場に行った。セ
ットで見て貰うために、シンが起動したISを僕が操縦して見せよ
う。そう思っていた。その結果がこれだ。確かにシンが男だとい
うことは隠せそうだが、それ以上の特殊性を知らしめていた。

ここまでしといて今更男だとばらしたりとか無理だって。君はい
い弟だったけど、ISを起動できたのがいけないのだよ。

「それって専用機？」

「量産型よ」

「他の人には使えないんでしょ」

「なんでアスカさんがヤマト君用にできるの？」

「兄妹だから？」

「いやいや、無理だって」

うん、流石にざわめきが収まらない。まあこれだけ異常自体が集
中してればしょうがないのかな。みんながこそこそと話す中で、シ
ンは完全に我関せずという顔でこの間拾ってきたラジオを弄りはじ
めた。うん、一応SHR中なんだけどね？

スパンッ

「なんで僕なんですか織斑先生」

「止める、あと非接触起動などという報告はあがっていなかったの

だが？」

「あ、あれ？　そうでしたっけ？」

そうだったっけ？　同じ日に織斑君がIS起動したから情報が錯綜してるんだよね……。

「まあいい、静にしろ！　詳細は休み時間にも聞けばいいだろう。続ける」

自己紹介再開。それでもひそひそ話はおさまらない。あ、織斑君がこっち見て嬉しそうにしてる。うん、後でね。

「よお、俺は織斑一夏だ。俺以外の男がいてくれて嬉しいぜ」

「キラ・ヤマト、ヤマトはミドルネームだから、キラって呼んでくれていいよ」

「そっか、俺も一夏でいいぜ」

SHRが終わるなり織む……、一夏君がやってきた。潑刺として人懐っこい、なんだかこういう子は新鮮だ。アスランは少々極端だったし、カガリはアークエンジェルにいる間は静かだった。本当のシンは知らないけど今はなんだか無機質な感じだし。誰かいた気がしたんだけど……、ああツールとムウさんだ。

ツールはアスランに、ムウさんはシンに殺されたんだっけ。トールのことは大分前から、ムウさんのことはここ一年忙しくて忘れてた。

もちろんシンがしたことは納得出来てない、でもシンに言われたことも納得できない。だからこうしてシンが正気に戻るのを待ってる。アスランとお互いのしたことを認め合ったときみたいに、彼とも生身で話をしたいんだ。……いつになるか、全く目処は立たないけど。

「……ラ、キラ？」

「ん、ああゴメン、ちょっとブーツとしてた」

「どうかしたのか？」

「いや、一夏君が昔の友達ににててね」

「そっか、なあキラとシンは兄妹なんだよな？」

「うん、にてないでしょ。僕は母さん似でシンは父さん似なんだ」
「なるほどな」

もちろん出まかせだ。ただ設定上双子に当たるので、それらしいことを口にする用意は充分してきた。さて、こっちからもなにか質問しようか？ そう思ったら、一夏君が先に口を開いた。

「ああ、あー、あの、キラ？」

言いたいことはわかるよ、一夏君さつきからシンのことチラチラ見てるよね。シンは気づいてるんだか気づいてないんだか、机の上に工具を広げていまだき珍しいラジオを分解している。向こうは愚か、こっちだって最近はやいタイにとって代わられてるのに。

「シンのことは気にしないで。初めてISに触れたときからずっとこうなんだ」

「そうなのか？」

遠巻きにこっちの様子を見てる女子達にも聞こえるように言ったそれは、半分ウソで半分ホントだ。デステイニーから下ろしたときシンはもう壊れてた。でもその時はまだもう少し人並みで、誰が相手でも声をかければそれなりの反応はあったし、機嫌がいいときは鼻歌も歌っていた。

でも三ヶ月前、アメリカでのIS学園入学試験直前、会場設営のアルバイト中に運び込まれた入試用ISに触れてからシンはほとんど人間に興味を示さなくなった。いや、自主的な意味では元々だったけど、それ以来僕以外の人間の言葉には反応しなくなった。どうもなにか気にしてるらしいけど、それ以外は元のままなのでよくわからない。

もちろん機械弄りばかりなのもそう。なんてったって一時期修理屋でお金稼げたくらいだし。

「事故だね。医者が言うには身体的には問題無いらしくて」

「だからIS学園にきたのか」

「ISはまだわからないことが多いからね、僕が目指すのは研究科だよ」

ISはまだ開発されて日が浅い、X線を発見したキュリー夫人がガンで倒れたように、これからなにがあるかわからない。それを今のところ理由にしている。

「へえ、色々考えてるんだな……、ん？」

だれかが一夏君の肩を掴む。長い髪を高い位置で纏めてリボンで飾っている。姿勢もいいし凛とした雰囲気が無いこともないけど、友人や本職の軍人を知ってる身としては……。まあ可愛いもんだねいや、そもそも女子高生を軍人と比べるのがどうかしてるんだけど。「すまない、ヒビキだったか？」

「……ああ、そうだけど」

一瞬反応しそこねた。便宜上付けた名字は想像以上に馴染まない、自己紹介のときに、キラかヤマトで呼んでくださいって言うべきだったかな。

「一夏を借りていいか？」

「それは僕に聞くことかな」

「そうだな、少しいいか一夏」

「おう」

……行っちゃった。なんだろう、知り合いだったのかな？ 名前呼びだったし。さて授業が始まるまでテキストでも読んで自習でも、「……ヒビキ君」「……」

二人が出て行った教室の入口から向きなみると、女の子が集まっていた。ああ、だからあの子は僕に許可を求めたのか。そんな気遣いができるなら、教室を出た方がいいとかなんとかアドバイスが欲しかった。

「ファミリーネームで呼ばれるの慣れてないから、キラかヤマトって呼んで」

「……ヤマト君！」「……」

休み時間いっぱい、不毛な質問され続けました。疲れたよ。

第一話・ ヒビキって思いの外馴染まない（後書き）

こんなシン・アスカを書いてごめんなさい。

この作品ではいろいろ詰め込む予定なので、突っ込み所だらけの展開になるかもしれませんが、よろしくお願いします。

✕アンケートにご協力ください。

ご協力ありがとうございました。今後の展開のめどが立ちました。
次回更新にご期待ください。

アンケートにご協力ください。

まず一点。

小説の書き方ですが、キラの一人称視点と、三人称視点、どちらが良いでしょうか？ 話しの大筋はどちらでも変わりません。

今のところ『第一話』が三人称、『第一話・』がキラ視点になっています。読みやすい方をお答えください。

そして二点目。

ISキャラとキラのカップリングはあった方がいいでしょうか？
一人決まった相手はいますが、他ヒロインの扱いでちょっと悩んでいます。

A キラの相手は一人でいい。

B キラと『○○』の絡みが見たい。

C むしろキラハーレム。

D いっそアスカちゃんと……。

A〜Cの三択でお答えください。

第二話 力だけでも（前書き）

お待たせしました。第二話です。

三人称視点（つもり）でお嬢様ルート模索中。

オリジナル・・・、というより独自解釈の設定が多々ございます。
敢えて言うならアンチIS学園？

第二話 力だけでも

「全部わかりません」

「ぜ、全部ですか？」

織斑一夏の潔すぎる宣言に、副担任は驚きの悲鳴をあげ、担任は静かに頬を引き攣らせ、クラスメイト達は呆気にとられ、キラはただ的中した嫌な予感にため息をついた。

休み時間の終わりに帰ってきた一夏の顔には、質問攻めでぐったりしたキラに申し訳なさそうな色と同時に、微かながら嬉しそうな色が乗っていた。幼い日の友情（？）を確認できたのだらう、この恐ろしい学園生活の中で知己を得たという事実は彼に多大な余裕を与えていた。

そんなわけで明るい未来への展望を抱くことが出来た彼は、入ってきた教師に言われるままにテキストを開いて四半刻、再びその顔に絶望の色をのせていた。

先ほどキラに指摘されたとおり彼は全く予習をしていなかったからだ。

ISは未知の理論、体系を取り込んだ装備である。使われる言葉も既存のものとは違うものが多く、またその理論や体系もけて理解できないものではないだろうが、十分な予備知識もなく扱えるものではない。彼の敗因はひたすら予習不足の一言に尽きた。

そうとは知らぬ副担任の山田真耶教師は、彼の表情に自身の勤めを果たすときが来たと胸を躍らせていた。不満だというわけではないが、彼女も己の仕事に誇りがある。このクラスに所属してから織斑千冬に持って行かれ続けている教師としての威厳をここでなんと

か取り戻そうと、

「なんでも聞いてください、なにせ私、先生ですから」

などやや興奮気味に声をかけたのだが、帰ってきたのが最初の台詞だった。これにはいかに教師といえどお手上げである。全部とはつまり全部だ。どこから、というよりなにかから教えていいのかもわからない。

むしろ自分がなにかを間違えたのかと女生徒たちに呼び掛ければ、誰もがわかっていると返して来る。

「いつそなんでわからないんですか、と怒鳴りちらせれば楽だったろうに、彼女の人格にはそういった強さは存在していなかった。あくまで原因を求め、悩み、そして、

「あ、もしかしてヒビキ君も！」

「いえ、僕はわかりますよ」

一縷見出だした答えは、机の上に立てたテキストを睨んだままのキラに、バツサリと切り捨てられた。

微妙な沈黙で教室が満たされるなか、担任であり姉である織斑千冬が口を開く。

「織斑、お前入学前の参考書は読んだか」

「うえ、その、ええと」

「必読と書いてあったはずだが」

一度キラに指摘されているためか、一夏の反応はいまいち齒切れが悪い。だが、彼がそれを読んでいないことは誰の目にも明らかだった。

「もついい、テキストはあるのか」

「それが……、古い電話帳と間違えて」

「再発行する、一週間で追いついて来い」

「いつ……、は、はい」

一週間、あまりに厳しい刻限に口を開きかけ、逡巡の後に彼は口をつぐんだ。先ほどまで教室の入り口あたりにいた織斑千冬が教壇の方へ歩いてくる。目前まで近付いた彼女の影に思わず目を伏せ、

「？」

目前で曲がり、通りすぎる影に一夏は詰めていた息を吐き出した。振り向いて見やれば、彼女は最後列に向かっている。生徒たちの目が集まる中、最後列、ヒビキ兄妹の前で彼女は足を止めた。顔をあげるキラ、振り上げられる右手、動かないアス力、影を作る出席簿、音。

「教師に手を挙げるか、ヒビキ」

彼女がふるったはずの出席簿は瞬きの間に床に落ちていた。その目の前にいるキラは席を立ち、左手を振り抜いた姿勢で彼女を睨んでいる。

睨み合う2人の横でアス力は一人なにか機械を弄っている。

「今度は撃ちます」

ISの部分展開、ならびに武装の呼び出し。グレーの装甲で覆われたキラの右手には一丁の自動小銃があった。織斑千冬は苦々しい顔でそれを睨みつけている。

「き、キラ！？」

一夏が悲鳴をあげるが、当事者達は黙って睨み合う。

「今は授業中だ」

「そうであっても、成果をあげるなら。そういう話しになっていたはずです」

アス力が叩かれそうになったのをキラがかばったらしい。そう理解したのは誰からだったか、ようやく生徒たちの頭は状況を認識し始めた。

織斑千冬は、冷静であり冷徹である。……そんな立ち振る舞いが上手い人間だ。だが、実際の彼女はさほど冷静でもなければ冷徹でもない。

彼女は目の前のイレギュラーに戸惑っていた。弟、織斑一夏の入

学は彼女にとって充分に想定範囲内であり、理解や納得はさておき覚悟できていたことだった。そこに問題は無い。しかし二人のヒビキは違う。キラにせよアスカにせよ本物の、ありえるはずの無いイレギュラーだ。

いや、『ありえない』なんてことが実社会でありえないことは彼女とて一社会人として理解している。それでも、ことISに関してはずいぶんイレギュラーなどあるはずが無い、そのはずだと思っていた。この分野を統括しているのは、正しくにこの世界のイレギュラー篠ノ之束その人なのだから。

だからほんの一週間前、ほんの偶然からヒビキ兄妹にたどり着いたとき、彼女は目眩を覚えた。ありとあらゆる点で。

IS学園はその名の如くインフィニット・ストラトス操縦者の為の訓練校である。高等学校という体裁はとっているものの、学校であるという意識は極めて低いと言わざるおえない。

まず入学資格はたった二点。義務教育を終えていることが証明できること、入試においてISを起動・操縦してみせること。操縦というのも、装着し腕を振り回す程度の能力で認められる。

また学校行事が少ない。入学式が無いことに始まり、主立った行事は保護者ではなく国や企業向けのものとなっている。

そして職員の質が悪い。名前で勘違いされがちだが、職員の中にIS関係者は10人もおらず、それ以外は基本的に一般的な教員や事務員である。両職員の関係は非常に悪い。一般職員がこの学園の性質上冷遇されているためだ。故に、情報や連絡事項が立ち消えになるなどのトラブルも少なくない。ヒビキ兄妹の情報も、そうして消えた情報の一つだった。

織斑千冬が見つけたのは、一夏が起動した打鉄にかわり入試で使われたラファール・リヴァイヴが故障した、という書類だ。

入試で一夏がISを起動してしまったとき、IS関係の職員は全員がその対応と対策を話し合うために席を空け、面接官として来ていた一般職員に後を任せてしまっていた。そのため、その後の異例

の事態は全て一般的な常識と良識をもって処理された。

障害を持つ兄妹一組の受験者も。

試験中に一次移行したISも。

前者は扱いに注意を払い入学を許可することに。後者はただの故障として。

だからその書類を見つけ、故障したというラファール・リヴァイヴを実際に見るまで、IS関係の彼女達はその異常に気付かなかった。

「試験、実技で成果をあげるかぎりアスカ・シン・ヒビキの素行は問わない。はずでしたよね」

アスカを入学させるに当たって、学園側はそういう扱いをすることに決めた。だが織斑千冬はそれを知らない。彼女はIS関係者側だからだ、常識と良識に従ったというそれはその耳には入らない。彼女が知っているのは、彼等のことは国際IS委員会にも情報が行ったばかりで慎重に扱わざるおえない、よって彼等が一次移行させたラファール・リヴァイヴの解体を中止して彼等に預けた。ということだけだ。

つまり織斑千冬にとって、アスカの行動は増長した子供のわがままに見えていた。間違っではない。すくなくとも障害を傘にきた甘えではある。しかしそれを知らないのは、彼女の甘えだ。

「生徒は平等に扱うのが信条だ」

もちろん、それは甘えなのだと彼女自身も理解している。故の建前、それをキラは鼻で笑ってみせる。

「自己紹介のとき、織斑君叩きましたよね」

「だから」

「弟だから叩いたんですよね」

「え？」

一夏が声を漏らす。叩かれた弟は一見平等の象徴だ、彼女は彼が自身を姉と呼ぶことを拒否してもいる。でもそれは表面上の振る舞いとしては当たり前のことだ、そうキラは続ける。

「名前しか言わない子、他にもいましたよ」

そう、自己紹介が満足に出来ないから叩いたというのなら、名前を名乗るだけで済ましたモノは他にもいる。特にキラの直前の順番の子や、最後辺りの順番の子は、『次』に期待していたのか早口でもあった。

黙ってキラを睨む織斑千冬、彼女をただ見返すキラ。ふとキラが目を見開き横を向いた。気付いて怪訝そうな顔をする彼女に差し出される出席簿、反射的に受け取り礼を言おうと目を向ける。

「あ、ああ、すまな……」

それはアスカの机から生えたロボットアームだった。しかもアスカ自身は相変わらず別の何かをいじっている。。

「び……！」

『び？』

織斑千冬の声にクラス中の声が唱和する、キラが頭を抱えた。

「備品を改造するなバカモノ！」

再度振るわれた出席簿。派手な音。今度はキラも庇わなかった。

「その……、キラ？」

授業が終わり迎えた休み時間、一夏は再びキラの下まで来ていた。

「どうしたの一夏、なんか歯切れ悪いけど」

さもあらん、仮にも姉に銃を向けられたのだ。素直な態度で接する道理も無い。しかしさっきの一幕を見れば正面からケンカを売るのも憚られるのだろう、一夏はあーとかうーとか唸りながら言葉を探している。

「ああ、もしかしてこれ？」

そついいながらキラがポケットから取り出したのは、さきに織斑千冬に向かつて展開して見せた自動小銃。キラはそれを一夏の顔に向け、躊躇わずに引き金を引く。

「っ！」

それは狙い過たず、綺麗に口に飛び込んだ。辺り所が悪かったらしくむせる一夏。それはただの水鉄砲だった。

「いくらなんでも本物を向けるわけないでしょ」

「げ、そりゃ良かった、がふ、でも口で言ってくれ」

「ごめんごめん、大丈夫？」

「ていうか辛！　なんだこれ」

「唐辛子水だけど」

「なんで！」

「ISのシールドすり抜けるかな？　って」

どうやらISの装備としてインスツールはしているらしい。確かにただの水なら攻撃と認識されず、シールドを通り抜け本体に当たるかもしれないが……、それでどうしようというのか。

「もちろん目潰しとかに使うんだよ」

高速戦闘中に追いつくわけないだろ。っていうか空間認識能力だかニュータイプだか知らないけど、地の文に突っ込まないでください。

「けほ、かふ、かは、はっ、ひどい目にあつた。しかも聞きたいことが違う」

未だに若干辛そうな顔ではあるが、一応落ち着いたらしく一夏はまっすぐキラに目を向ける。深呼吸、

「俺が聞きたいのはキラのことだ」

「僕？」

「なんでここに来たんだ？」

一夏はIS学園に来たくは無かった。行くつもりの学校は別にあつたし、日々を共に過ごす予定の友人も何人かいた。漠然とでもゴールデンウィークや夏休み、文化祭だって楽しみにしていた。その

ほとんどが消えてしまったのだ。予習をしていなかったのは単に間違えてテキストを捨てただけでは無い、ささやかな反抗心だった。

対してキラはどうだろう？ アスカの付き添いできたと言うが、一夏から見て彼はまるで当たり前のようになっている。予習もしているらしいし、先の振る舞いを見ればISを使う訓練もしているように見える。

「必要だからかな」

「必要？」

「必要で、できる。ならやるしかないじゃない？」

答えはひどく簡潔でまさに一夏が期待していた答えだった。

一夏にISは必要無い。でもできる。できるならできるなりに、すべきことが有るのだらう。諦めていたことだって叶うかも知れない。

「そつか、できるからか」

「目標が無いのはダメだけどね」

「目標？」

「想いだけでも、力だけでも」

キラは胸元の指輪を二つまとめて握り締める。想いと力と、誰でもないキラにとって、それらはたしかな象徴だ。歌姫に預けられた白い指輪、平和の祈り。この世界で手に入れた黒い指輪、IS。きつとこれからも、何度もこの二つを握り締めることになるのだらう。そう思いながら彼は一夏に笑みを向ける。

「力だけだといつか後悔するから、ね」

「キラってなんか……、大人なんだな。ホントに同い年か？」

冗談めかした一夏の言葉に、キラは笑顔を崩さず、

「しかし織斑先生も意外と抜けてるよね、IS起動したんだからそこで反省文書かせれば良かったのに」

「は」

ちよつとわかりやす過ぎるくらいわかりやすく話題を変えた。しかしとつさに選んだ話題が会話相手の肉親の悪口って……。

「名選手名監督にたらずってやつかな、ブリュンヒルデなんていつでもやつぱり人間だね」

「おいキ「馬鹿にしていますのあなたは！！」」

なんの照れ隠しか知らないけどいくらなんでも言い過ぎだ、そう思った一夏が口を開くと同時にキラの机を叩いた生徒がいた。

「ブリュンヒルデは世界最強を示す名前、この学校に通っている全ての女性……、いえ世界中の人間が憧れる名前ですよ！ 例えどれだけ動かせたとしても、ISに触れて一月にもならない人間が貶めていい名ではありませんわ！」

「君は確か」

「セシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ！」

もう一度机が叩かれた。

縦ロールが入った長い金髪、真っ白なロングスカート、碧い瞳。

絵本に出てくるお姫様のような見た目の女生徒は、見た目とは裏腹に激しい性格をしているようだ。

「いつから聞いてたの」

「そんなことはどうでもいいことです！」

さらに机を叩くセシリア。

「自力でISを扱えないにも関わらずその思い上がり……、違いますわね。自力であるうと無かろうと、ISを操縦できるならばこそ許されざる言葉です！」

あげく顔を突き合わせ額が触れそうな至近距離で睨みつける。

「今すぐ詫びなさい、その名を貶めたことを！」

「ブリュンヒルデだろうと何だろうと、教員免許も持っていない人間が教師を名乗る方が馬鹿にしていると思うけどね」

そのまま怒りを口にするセシリアと、静かに帰すキラ。わずかながら会話が噛み合っていない。セシリアの望みはあくまで、自身が世界中の女性が憧れるブリュンヒルデの名の名誉であり、キラが論点にしているのは織斑千冬がアス力を叩こうとしたことだ。だが、どちらもその食い違いを問題にしていなかった。

「ぐぐぐ……、決闘ですわ！ 借り物の力でそれだけの大口を叩くのなら、見せてもらおうじゃありませんか！」

激したセシリアが、勢いのまま時代錯誤な言葉を吐きだした。借り物の力、というのはアス力が起動したISを操縦する、ということが引掛かっているのだろう。対するキラにとって私闘はタブーだ、感情による殺し合いは悲劇にしかならないというのが彼の経験だった。

殺し合いでないにしてもキラの気持ちは変わらない、断るために口を開いて、

「いやだ、理由が」

チャイムが鳴り響いた。

「く、次の休み時間に話の続きですわ！ 逃げないで下さいまし！」
そう言って身を翻した彼女を、キラは口を開けたまま見送ることになった。そんな彼に思い出したように一夏が声をかける。

「代表なんたらって、専用機を持つてるっていう？」

「国家代表IS操縦者候補生、多分このクラスで1番プリュンヒルデに近い人だよ」

「そっかあ。……なあ、なんか最後話が食い違ってなかったか」

「……かもね」

外から聞こえて来る足音に気付いて、一夏は席に帰っていく。軽く手を振りながら見ていると、席にたどり着くと同時に扉が開き、織斑千冬が顔を覗かせた。慌てて座ろうとした一夏が椅子をひっくり返して目を白黒させている。呆れた顔で入ってきた千冬は出席簿で一夏を叩こうとして……、止めた。教壇に立つ。

「全員いるな、授業の前に連絡事項がある」

そっいいながら操作されたディスプレイに『クラス対抗戦』の文字が浮かぶ。

「再来週行われるこれに出場する選手を決める。自薦他薦は問わな

いが出場した者は一年間クラス代表として動いてもらうからそのつもりで考える。今日中というわけではないから……、どうしたオルコット」

爛々と目を光らせ、手を高くあげたセシリアにクラス中の視線が集まる。

「ありがとうございます織斑先生。実は私、先程ヒビキさんと決闘の約束をしましたの」

「ほう」

「クラス代表は対抗戦の選手でもあります。私、勝てない方に出てほしくはありません」

「試合で決めさせるといふのか」

「そのとおりですわ」

ふむ、と顎に手を当て考えるそぶりを見せる織斑千冬。ご存知のとおりキラは決闘を承諾していない、これは彼を逃がさないためのセシリアの方便だ。キラにとって不幸なことに、この方便は見事図にあたっていた。

「いいだろう。異論があるものはいるか」

「織斑先生、僕は」

「これは既に私闘ではない、クラス内ではあるが正式な決闘として処理される。当然学園がバックアップするが、問題か？」

「いえ……、ありません」

キラとアスカは悪く言えば実験体だ。アスカの素行を問わない代わりと言っただけいいかはわからないが、キラはデータ取りには拒否権が無い。それはつまり、学園が正式に許可した決闘などを断れないということでもある。

織斑千冬もそれを理解している。一種の意趣返しだ。

「他に異論はないか？ ないなら」

「先生おりむ」「織斑君も」「だけじゃな」「男子両ほ」「もう一人」「どうせなら」

「あるぞ……、いやあります、異論」

一斉に女生徒達が同じことを口にしようとする中、当事者、織斑一夏が机を叩き立ち上がった。キツと一瞬織斑千冬と目をあわせた後、キラ、セシリアと視線を動かし、まっすぐ視線を合わせる。

「俺も、俺も参加させてくれ」

「織斑、それは立候補する、ということか？」

一夏は答えない。彼の視線はセシリアから外れない。この場の責任者は織斑千冬だが、発案者、場を作ったのは確かにセシリア・オルコットその人だ。例えば口の上で参加しても彼女が納得しなければまともに相手をしてはもらえない、彼はそう思っていた。

「織斑一夏さんでしたわよね」

「ああ」

「私、入試で教官を倒し首席合格を果たしましたの。ヒビキさんの実力は知りませんが、先のIS展開速度は教官並に見えましたわ」
唾を飲み込む。

「そこに踏み込むというのなら、それなりの実力を示していただきたいですね」

目を閉じ、深呼吸。

「教官なら、俺も倒したぜ」

「面白いジョークですね、ハツタリでもその度胸は認めて差し上げますわ」

一夏は言い返さない。事実ではあるが真実ではないことを自覚しているからだ。少なくとも今求められているのが、相手が自滅してくれる強運でないことくらいわかっている。

「ちふ……、織斑先生」

「ん、まあ確かにお前は教官を倒した事になっているな」

「私だけと聞いていました」

「織斑は別枠でな、入試の結果が成績に反映されていないんだ。ちなみにヒビキはそもそも戦っていない」

IS試験は各国で同じ水準で実施されている。が、今年日本に限っては試験会場にISを使用できる職員がいなくなったため、実戦試験を受けたのは一夏だけだった。

「ブリュンヒルデの弟、ただ者ではないということですね。良いでしょう、受けて立ちますわ」

片手を腰に当て、反対の手で一夏を指差し宣言するセシリア。それはどちらかと言えば宣戦布告する側のポーズなのだが、そんなことを気にするものはいない。織斑千冬はただ一つ頷いた。

「では来週この時間にアリーナを借りる、参加したいものは今日中に申請すること。以上、授業を再開する」

セシリアは満足そうに席につき、一夏は気合いを入れて教科書をとった。びっくりするくらい蚊帳の外になってしまったキラの隣で、アスカは相変わらず新しい機械を組み上げている。

「……」

その目は虚空を見つめたまま微動だにしない。

第二話 力だけでも（後書き）

ほんとはこの半分くらいの文章量だったはずなのに・・・、解せぬ。
お嬢様のフラグを建てるつもりだったのに・・・、解せぬ。
織斑一夏の動きが違いすぎている・・・、解せぬ。

今回は色々な説明を詰め込みすぎて、冗長で読みにくいと思われる
す。申し訳ございません。

そのうえシンが相変わらず空気ですね。もう一息お待ちください。

ちなみに筆者は織斑千冬さんが嫌いなわけではありません、可愛い
人だと思っています。

第三話 やめてよね（前書き）

大変長らくお待たせしました。

正直時間をかけすぎて逆に雑で支離滅裂になった気が……。感想、質問、指摘等、お待ちしております。

第三話 やめてよね

「キラ！ 俺にISのことを教えてくれ！」

放課後になるなり、一夏はキラの下へ飛んで行つた。ISの事を聞くためだ。一応もつと適任（だと思われる）の相手を知っているのだが、いつの間にか帰ってしまったらしく見当たらなかったようだ。とにかく、そんな彼を前にしたキラはというと、まとめかけた荷物を脇にやり、ため息をついて彼を受け入れた。

「うん、それ無理」

そしてにべもなく切り捨てる。

「こう見えても苦学生でね、放課後はシンの世話とバイトで忙しいんだよ」

「バイト？」

「アメリカにいた頃お世話になつてた企業のね、プログラミングのしもつけって言うのかな？」

「下請だろ……、じゃなくて学費払ってるのか？」

「うん、推薦とかで来たわけじゃないし」

ちなみに各国代表候補生、篠ノ之箒、織斑一夏は特待生扱いで学費が免除されているが、キラとアス力はそこら辺も保留になっているため学費を払っている。

アス力はともかくキラに関しては、特異なケースではあるがそれが貴重かどうかわからない、というのが現状なのだそうだ。恐らく今、世界各国並びに各企業では双子の男女間でのIS起動、操縦実験が行われている頃だろう。

「そっか、じゃあ休み時間なら」

「ていうか一夏教官倒せたんでしょ？ なにをそんなに焦ってるのさ」

キラの言葉に眉をしかめる一夏。

「……実はな、」

一夏は教官を倒した。一応そうなつてはいる。ただそれは一夏が対峙した教官が戦闘不能になったというだけで、倒したのかと言われれば返答に迷うところだった。簡単に言えば教官は自滅したのだ。一夏がした操作は僅かに身を翻し、突進を避けただけ。それで操縦に自信などあるはずも無い。

「やめてよね、戦いにすらなりそうにないじゃない……」
「だからさ」

「無理なものは無理、そもそも知識云々以上にまず実体験が必要じゃないか」

肩を疎めるキラに、また少し悩むようなそぶりを見せる一夏。実際そうかと言われればどうかはわからない、あくまでそれだけで切り抜けてきたキラの意見なのだが、一夏はそれを真面目に受け止めていた。

「じゃあ……、勉強はやるから模擬戦の相手になつてくれるとか」
「放課後空いてないつてば、それに教師がいない時はシンをISに近づけちゃいけないことになつてるし」

訓練機と専用機の違いは、形態移行しているか否かという一点にある。形態移行、すなわちパイロットへの最適化。そして最適化するためにまず必要なのが初期化だ、アス力にはそれを媒体無く行えるかもしれない、という嫌疑がかかっている。訓練機は最適化しないのが売りなのだ。勝手に初期化されては授業に差し支えが出る。また、最適化し一次移行まですると、初期化した後武装や装甲の調整修理までしては避けなくなる。短くても一月はかかるそれは、学園側としてもできるだけ避けたい事態だ。

「だいたい姉弟なんでしょ？ 織斑先生に教えてもらえば」

「キラのせいでちよつと気まずいんだよ」

「じゃあ朝の休み時間のときの子は」

「休み時間のつて……、ああ篠ノ之か」

キラの言葉に困つたように名前を呟く一夏。それを聞き、ふとキラは何かを思い出したような顔をした。珍しい苗字だが聞いたこと

がある気がしたのだ、それもつい最近。

「篠ノ之つて、まさかISを開発したっていう」

「ああ、その妹だよ」

「僕よりよっぽど適任じゃないか」

「うーん」

「そこでしぶるなら、そもそもなんで決闘に割り込んできたの？」

キラのもっともといえbaumももな問いに、一夏は少し考えるそぶりを見せた。

何故キラなのか。

何故挑んだのか。

違う、そうではない。助けを求める相手をえり好みできるような理由で戦いに臨んだのか、とキラは聞いているのだ。

しぶる理由はなんとなく嫌われているようだから、と言い訳をしてもいい。相手が嫌がるというのが理由なら、こちらの善し悪しではないのだから。問題は戦いに割り込んだ理由だ。もちろん彼なりにそれなりのモノがある。あるつもりなのだが、一夏自身今一よくわかっていなかった。

なんとなくと言うのが、一番答えに近いだろう。それを良しとするかは別として。

「僕も忙しいし、納得できないことはしないよ」

「うう、わかったよ」

アスカの机の上の機械——マニピュレーターだろうか？——を量子化したキラが席を立つ。一夏もひとまずはと鞆を持ち立ち上がると、そこへ副担任の山田真耶がやってきた。

胸元にはぶ厚いテキストを抱え、急いで来たのだろう。顔は赤いし、若干肩を上下させ息を荒くしている。二人の顔を見ると安心したように顔が明るくなった。

当の二人はテキストで潰れたあれとかに釘付けになっていたが。

「織斑君まだ教室にいたんですね。良かった」

「は、はあ」

「どうかしました」

深呼吸。息を整えた彼女は、笑顔を作って一夏にテキストを差し出す。

「まずはこれ、再発行したテキストです。今度はなくさないでくださいね」

「あ、どうも」

「それから織斑君の入る寮の事なのですが」

「あれ？ 俺一週間自宅からだって……、あ、キラと同じ部屋とか」
「違うと思う」

他人にアスカの世話をさせるわけにはいかないので、アスカと相部屋かアスカを個室にしてほしい。キラは予めそう頼んでいた。一週間前最低限の荷物を運び込んだ時は、確か二人部屋だったはずだ。
「ええ、ヒビキ君はアスカちゃんの部屋です。ただ、なにぶん色々ありまして、今後部屋が変わることもあると思います。そして織斑君」

袋から取り出した鍵を渡す山田教師、一夏は神妙な顔でそれを受け取る。1025、キラが出した1030の鍵を見て、彼は少しだけ部屋番号が遠いことに落胆したようだった。

「そうそう、織斑君も相部屋です」

「え？ どうゆうことですか」

「ごめんなさい。一月もしたら個室も開くと思いますから、しばらく我慢してください」

「え……」

「それじゃ私は失礼します」

忙しい忙しいと言いながら彼女は行ってしまった。呆然とする一夏にキラが声をかける。既に荷物をまとめ終わり、帰り支度は完全に済んでいるようだ。

「とりあえず部屋に行ってみたら？ ダメそうなら寮長さんをお願いすれば良い」

「お、おう」

「あれ、おはようキラ」

一夜明けて。結論から言えば一夏の相部屋にはなんの問題もなかった、相手が幼馴染みの篠ノ之箒だったからだ。部屋に入ったとき彼女がちょうどシャワーを浴びていて一悶着あったのだが、なんだかんだ言って二人とも落ち着いたようであった。

それと比べてキラの部屋は、荷物を運び込んで以来放置していたせいでとても過ごしにくい状態だったりしたのだが。まあ関係ない話である。

「おはよう一夏、どうかした？」

「食堂で見なかったなと思って」

「シンがいるからね。部屋で食べてる」

「大変だな」

「なれたよ。それよりI Sの勉強どうするの」

ぐっ、と一夏が言葉につまる。昨晩はドタバタしてそれどころでは無くなったのだが、ルームメイトを考えれば昨晩でも今朝でも相談できたはずだ。キラはそんなこと知らないのだが、彼はまるでまたサボっていたことを指摘されたような気分になってしまう。

「やっぱりキラ」

「だから無理だって。テキストもらったんだし自習でもすれば？」

「……そうする」

結局一夏はうなだれて自分の席に戻ることとなった。まもなくチャイムがなり、二人の教師がやってきてS H Rが始まる。

「来週の試合だが、第3アリーナで行う。参加者は織斑、オルコツト、ヒビキの三名だ。クラスの代表を決める試合だが、授業の一環でもある。各自間違っても遅刻などしないように」

教師の口からでた連絡事項に生徒達が口々に返事をする中、テキストと睨み合いをしている一夏が織斑千冬の目にとまった。思い出したように口を開く。

「織斑、お前の機体だが時間がかかるぞ。予備機がないので、学園

で専用機を用意するそうだ」

「専用機、俺に？」

その言葉に、女生徒達がひそひそと騒ぎはじめる。が、一夏は今のうかない顔だ。勉強中の彼にとって、専用機とは姉のそれ、モンド・グロツソ出場機、セシリアやキラのそれなどに当たる。彼は今、転がり込みつつける力の大きさに戸惑っていた。

「本来なら専用機は国家や企業に所属している人間に与えられるのだが、お前の場合はデータ収集を目的として特例で与えられる。わかったか」

「な、なんとなく」

「それでは連絡事項は以上だ。各自授業の準備をするように」

織斑千冬という言葉で、要するに自分は実験体なのだと一夏は漠然と理解する。理解して、彼は再びテキストを開いた。

動かせないはずのISを起動し、気が付けばこんな場所に連れてこれられ、幼馴染みがいて姉がいて同類がいて、反抗心が甘えだと思われ、思わず他人の戦いに割り込み、さらに力が与えられて。

一夏は徐々に、自分がどこにいるかを見失いつつあった。

「一夏、大丈夫か？」

時は巡り金曜日。一夏は既に三日間を無為に使ってしまった。一応の体で自習はしていたものの、身になっていないのは同室の篠ノ之箒の目にも明らかだ。むろん、そんな幼馴染みを前に彼女もただ手を拱いていたわけではない。

日々の食事にも同席していたし、わからないところがあるようなら教えた。剣道部の練習にも連れ出してもみた……、いろんな意味で練習にならなかった。二度目はなかったが。とにかく彼はなにかに意地になっているようで、彼女も受け入れてもらえずあまり効果がなかった。

篠ノ之箒は織斑一夏を好いている。

だから今、最善の策の一步前をもって、彼に声をかけていた。

「気分転換というわけではないが、これを見ないか？ 資料室で借りてきた第一回モンド・グロッソの映像資料なんだが」

「モンド・グロッソ……、千冬姉が出てた奴か」

「ああ」

ディスクがセットされ、一夏のベッド側の壁にあるディスプレイに映像が流れる。彼のベッドの淵に腰掛けた箒に促され、一夏もテキストを手放しその隣に腰掛けた。ISの基本説明、各国の大まかな機体特性と操縦者のの紹介、来賓や企業の紹介、そして開催宣言。発表されるトーナメント表。

「なんか、偏ってないか？」

「第一回モンド・グロッソは、ISがいかに関用性があり、現行の技術を活かせるかを証明するために行われたそうだ。よって最先進国である日本はその分多く戦わされる、昨日の授業でやっていたはずだが」

「そうだったか」

画面の中では、真っ赤な機体と黄色い機体がマシンガンの撃ち合いから始め、赤い方が銃身を固定もせずにキャノン砲を撃つたと思えば、黄色はそれをシールドで受けお返しとばかりにミサイルを放ち、キャノン砲からショットガンに持ち替えた赤がそれを残さず打ち落として見せれば、放った黄色はそれで動きが止まったところに固定式ガトリング砲を叩き込む。当時当たり前に存在した兵器をいかに効率よくISに運用させるか、という題目で搭載されたはずの通常兵器は、そのカタログスペックを裏切りISのカラーリング並に派手な戦いを展開している。

長大なキャノン砲の砲身をバトンの如く振り回すことに一体いかなる意味があるというのか……。

「うお、スウエーで銃弾回避してるぞ」

「見た目だけだ、シールドバリアに当たっている」

「の、のけぞりながら両腕を回して？」

「足を撃たれたら終わりだろう」

「そのままの姿勢で跳躍を！」

「ISの性能の無駄遣いだ！」

急所に当たれば絶対防御が発動することもあるので、まんざら無駄というわけでも無いのだが、労力と見た目の派手さの割には実利を伴わないのも確かだ。

ともあれ幾度目かの試合、観客や司会の熱の入り方が違う一戦、出てきたのは日本の武者鎧を思わせる薄暗い色の機体。

織斑千冬——暮桜。

開幕と同時に乱打されたライフルの弾は避けられ、マシンガンはその三次元軌道を捕えきれず、追いつめるミサイルを全て切り裂かれ爆散し、詰まった距離に焦りを感じ抜いた近接用ブレードは相手のそれに叩き切られ、光を放つ返し刃で鎧ごと切り伏せられて試合は終わった。終始相対した側だった視点の中でただ一つわかるのは、この試合の主役が織斑千冬であること。暮桜ではない、織斑千冬だ。機体の性能には大きな差は見られない、武装を見ればむしろ貧弱なくらいだ。圧倒的なのはその動きのキレ。操縦者の腕前に他ならない。

「当時の選手は専属の者ではなく、研究開発者が兼ねていたというが……」

確かに他国の操縦者の動きは遅いかもれない。だがその武器は本物だし、研究者は研究者なりに理解してそれを武器として完成させて来ている。だからそういうレベルの問題ではない、単純に織斑千冬が人間として一つ飛び出してしまうのだ。

審判が勝敗を言い渡し、盛大な歓声に包まれて彼女はピットに戻っていく。入れ代わりに別の選手が入場し次の試合が始まる。

その試合が終わればまた次の試合。そしてそのまた次。一夏は黙ってそんな映像を見つめていた。

「第、二回目のはあるのか」

「い、いや、それは」

幾度目かの彼の人の試合。ふと思い出したように小さく、呟くような彼の言葉に、箒は若干オーバーなりアクションをする。

「そうか、そうだよな」

その反応に何かを納得し、一夏は立ち上がる。

「ありがとな箒、ちよつと行ってくる」

「……ヒビキか？」

「ああ」

「なぜだ？ 控えめに言っても、あいつは千冬さんを馬鹿にしていただろう」

箒は慌てても立ち上がり、部屋から出ようとする一夏に詰め寄った。

彼女は決闘のきっかけとなったやり取りを聞いていたし、彼がその姉を大事にしていることをよく知っていた。この映像ディスクを持ってきたのもそのためだ。

だから最初、彼女は彼がクラス代表決定戦に参加を表明したとき、その手で姉の仇を討つつもりなのかと思っていた。いっそそうであることを期待していた。なぜなら彼女は、彼が姉に頼ろうとしないだろうことを知っていたから。そうなれば頼られるのは自分だと思っていたから。

だが違った。

翌日彼は真つ先に敵であるはずのキラ・ヤマト・ヒビキに助けを求めた。姉であり教師である織斑千冬でも、幼馴染みでありルームメイトである篠ノ之箒でもなく、だ。他の女生徒に頼られるよりはマシかもしれない。けれど、彼女には一夏がなにを考えているのかわからなくなった。それをずっと知りたかった。

そんな箒の想いを知ってか知らずか、一夏は振り返り彼女と向き合った。ようやく自分を見てくれた……、そんな安堵と共に、彼女は想いを吐き出す。

「私だってお前にISのことを教えることくらいできる」

「そっか」

言ってから、自分の拗ねたような口調に気恥ずかしさを感じ俯いてしまった箒に、一夏は軽く相槌をうつ。

「ISのことは箒に教われれば良かったな」

そう続ける彼の顔は、まるで憑き物が落ちたように朗らかな笑顔で、再開して以来疲れたような顔や困ったような顔ばかり見ていた彼女は、ほんの一瞬それに見とれた。

「でも俺はそのためにキラにこだわってるんじゃないんだ」

「え？」

「あいつ、必要でできるからやるって言ってた」

やるしかない、キラはそういった。

「俺には必要じゃない、できるとも言えない、でもしたいんだ」

それは漠然としたままの、まとまりのない言葉。あるいはただの衝動。

「千冬姉を守りたい」

ただ一点に集約してしまうモノ。

「それをキラに認められたいだけなんだ」

言いたいだけ言って、一夏は部屋を出ていく。それを見届けた箒はゆつくりと後ずさり、手近なベットに倒れ込んだ。

箒はキラと直接対話したことはない。だから一夏がなにを言いたいのかが今一わからない。結局それは宣戦布告では無いのか？ 結局キラに教わりに行くのだろうか？

「千冬さんを守る……、か」

そうつぶやいて布団に顔を埋めた。どうせなら自分の名前を出してほしい、というのは恋する乙女の贅沢だろうか。

相変わらずディスプレイの中では織斑千冬が他国のISを歯牙にも掛けず叩き伏せ、スピーカーからは彼女を称賛する声が流れている。リモコンに伸ばした箒の手は空をさ迷い、すぐに落ちた。そして布団を抱き寄せる。眠るわけではない、明日教えてくれとせがまれたのための充電しているのだ。誰にもなくそんな言い訳を

しながら、彼女は待った。一夏が帰ってくるのを。

土曜日と日曜日、つまり二日、48時間。それは瞬くまに過ぎた。
月曜日、戦いの時迫る。

第三話 やめてよね（後書き）

ようやく次回試合開始です。

長かったですが、あくまで設定の紹介があつたから。次からはもつとテンポ良くすす……、むといいなあ。筆者はアニメ並のテンポで進めたい。

なお、所々とばしている授業中の会話や食堂、自室のやりとり。なにより土日の出来事などは、代表決定戦編終了後に番外編として紹介するつもりです。

請う、ご期待！

第四話 お互い（前書き）

お待たせしました。

HDDが吹き飛びデータ復旧中の筆者です。

今回はバトル回となります。

筆者はバトル描写は苦手です。日常描写も苦手です。

じゃあなにが得意なんでしょうね？

そろそろシンを活躍させたい。

第四話 お互い

月曜日第三アリーナピット、そこでは今数名の男女がモニターを見つめていた。一人の男子生徒は不安そうに、一人の女子生徒はそんな彼を励ますように、一人の女生徒は苛立ったように、そして最後の一人は心ここに有らずといった風情で。

モニターに映っているのは薄紅色のIS。色や細部のデザインは多少変化しているが、背部にある四枚のウイングスラスターや戦車を思わせる角ばった装甲など、おおよその形は間違いなくラファール・リヴァイヴ。操縦者はキラだ。

男子生徒、一夏がふと口を開く。

「キラ、待ちくたびれて無いかなあ」

そのまるで他人事のような言葉に苛立っていた女生徒、セシリア・オルコットが声を荒げる。

「なにを呑気な、あなたを待っているんでしょう!」

「い、いやこればかりはISが来ないと」

「あーもう、いつになれば織斑一夏のISは来るんですの……、というよりなんで最初がキラ・ヒビキと織斑一夏なんですの!」

これはそもそも私と彼の決闘だったはず……、そう息巻く彼女に別のモニターから冷ややかな声がかかる。

『勘違いするな、これは既にクラス代表の決定戦であり授業の一環だ』

「織斑先生」

織斑千冬の声だった。もつともカメラは固定されているようで、モニターに映っているのは山田真耶なのだ。

『厳正なる協議の結果、相応しいと思われる形で組んだだけだ』

「他意は無いとおっしゃられますの」

『教師に対して随分不遜な物言いだな』

セシリアは一度モニターを睨んだが、モニターを睨んでも織斑千

冬ではなく怯えた山田真耶しか映らないのでは張り合いが無いのだろう。しばし瞑目した後少し下のスピーカーに視線を移し言葉を続ける。

「一戦目がキラ・ヒビキ対織斑一夏、二戦目が私とキラ・ヒビキ、三戦目が織斑一夏と私ではそうも言いたくなりますわ」

『なにが言いたい』

「いささか弟さんへの肩入れが過ぎるのでは無くて？」

一戦目で慣らさせ、二戦目で研究させ、三戦目で勝たせるつもりかと、セシリアは言っていた。しかも他二人とは違い彼は一戦分休憩できる。もちろんこれは苛立ち混じりの、当て推量と言っても良いようなものだ。だが、一夏も第も思わずスピーカーに目をやった。

『穿ちすぎだな』

静かな声が帰ってくる。

『単に機体スペックと経験値から選んだに過ぎん。代表候補生であるお前と比べあと二人には圧倒的に経験が足りていない、先に一試合でもさせておくのは当然だろう。そのうえで授業としての価値を持たせるために第三世代同士の戦いを最後に持ってきたのだ。理解したか？』

それとも、と織斑千冬は言葉を続ける。

『真つ当にISを動かしたことがない人間を一方的に潰すのが趣味だというなら考えんでもないが』

確かに一夏には（公的には）入試の実績があるがキラにはなく、なおかつ第三世代機と一次移行してるとは言え第二世代機では明確な差がある。セシリアの希望は互いに初戦、もしくは互いに二戦目と言ったところだろうから、ただのわがままと言ってしまえばそれまでだ。

もちろん、土曜日に二人が訓練していたことや入試の真実を鑑みていない以上、一切私情が入ってないかといえば怪しいところではあるが。

無言でスピーカーを睨むセシリア。どうもマイクのスイッチだけ

は入ってるようで、静かに空調の音が響く。

やがて無駄だと悟ったのだろう、軽く頭を振り彼女は引き下がった。

「それで一夏、大丈夫なのか？」

沈黙の中で益体も具体性も無い言葉を口にしたのは一夏に付き添った女生徒、篝だ。それに一夏は笑顔で答える。

「おう、まかせとけ」

これまた具体性の無い返答だった。

「そ、そうか。大丈夫か」

「ああ、キラにもお前にも色々教えてもらったしな」

「うむ」

会話、とは言い難い応答。それでも二人とも大まじめだ。言っているうちに元気が出てきたようで、一夏の顔からさっきまでの不安そうな色が消えている。

一夏が気合いを入れ直すと同時にスピーカーが繋がる音がした。

『織斑君、織斑君聞こえますか？ 来ましたよ！ 織斑君専用のISが！』

山田真耶だ。モニター越しに彼女がこっちに呼びかけているのはつきり見て取れる。同時に搬入用エレベーターのドアが開き、一体のISが部屋に入ってきた。

『織斑君専用の第三世代型IS、その名も』

重厚な装甲、両肩のフロートユニット——ウィングスラスター、所々に施された暗い青の意匠、くすんだ白い装甲は、まるで命を吹き込んでくれと訴えているようだ。

『白式です！』

「白式」

一夏はまるで魅せられたように手を触れた。

過去二回、ISを操縦したときとは違い繋がった感触がある。いっただったか授業中に言われた、パートナーと言う言葉が頭を過ぎった。一夏は白式が自分に呼びかけていることを明確に感じ取った。

「白式……、わかる。これがオレの力」

『織斑、すぐに装着しろ。時間が無い、初期化はすんでいるから最適化は実戦でやれ』

スピーカーから声がかかる。セシリアはそれを聞き、信じられないものを見るようにスピーカーを見たが、唇を噛みながらすぐに視線を逸らした。代表候補生としてISを動かしてきたセシリアは、初期化しながら最適化していないISを操縦するというのがどういうことなのか、正しく理解していた。

訓練機、つまり初期化していないISは誰にでも動かせる様になってきている。そのかわり、大概の場合操縦者の期待するスペックを満たせない、つまりすぐに物足りなくなる。対して初期化したISは誰にも動かせない、ISは過大な情報を操縦者に送り、その動きを大袈裟にフィードバックする。要するにまともに動かない。まともに動かないように設定されていると言っても良い。だがそのかわり最適化すれば操縦者の要求に完璧に応えてくれる。なんにせよ、このままなら一夏が大敗を喫するのは間違いないだろう。

だがセシリアはそれを訴えることが出来なかった。一夏が早々に敗北するなら、彼女はより万全に近い状態のキラと戦えるからだ。義理はない。

そんなセシリアの心配をよそに、一夏は箒達に助けられながらISを装着していた。といっても、待機状態で鎮座するそれに背を預け起動させるだけだが。

『気分はどうだ、行けるか？』

「ああ、行け……！？」

目の裏で光が炸裂したような衝撃が一夏を襲った。先とは比べものにならない量の情報が彼の脳を侵す。

いや、比喻ではなく現実でも光が炸裂していた。彼を中心に。

「一夏……！」

「何事ですよ！？」

『び、白式のデータが書き換えられて……』

『ヒビキか！ 一夏、引き離せ！』
「いや」

「いや、大丈夫だ」

不足の事態に沸き立つその場を、本人の静かな声が収めた。
白式の姿が変化していた。

鈍色とも言えたくすんだ白だった装甲は純白に、暗い青の意匠は青と金に。ウイングスラスターは大きく開き、金色の羽が見える。

「なんかよくわかんないけど……、どうやら白式は俺専用ってことでいいらしい」

『ファーストシフト……、まさか本当に……』

白式の左側に立ち、その腕部装甲に触れていたアスカが、誰もが視界から外していた最後の一人がゆっくり離れる。しかし誰も気に止めない。唯一一夏だけ、サンキュ、でもいいのか？ などとまを外れな声をかけたただけだ。

あとは全員目の前の出来事にかたまってしまっている。前代未聞、いや、聞いたことはあるのだが。

「それじゃ、行ってくるな箒」

「お、おう。……勝ってこい」

一夏の言葉に辛うじて箒が正気に戻り、つづいてセシリアが咄嗟に展開していたISを待機状態へ戻す。

「せいぜいキラ・ヒビキの手のうちを暴いてくださいまし」

嫌味も忘れない。それに苦笑を返して、一夏は真っ直ぐ飛び出していく。

ようやく、クラス代表決定戦が始まる。

「武装は近接戦用ブレード雪片二型、千冬姉が使ってた……」

キラはただ静かに立って待っていた。一夏も地面に下り静かに近づいていく。残り20メートル程だろうか、キラが右手にアサルトライフルを構え牽制する。一夏は足を止めた。

「遅かったね一夏」

「……ああ、待たせたな」

キラの手の中でライフルが光になる。

「名前は？」

「え」

「そのISの名前だよ」

「ああ、白式だ」

「び、びやく？ ひやく……？」

「白って書いて『びやく』、白夜とか言うたろ」
「なるほど」

神妙に頷いて見せるキラがおかしくて、一夏は少し笑った。

「キラのはなんて言うんだっけ」

「昨日教えたじゃないか」

「操縦を覚えるのに必死で……」

「ラファール・リヴァイヴ・ファーストシフト」

キラの足が、キラのISの足が地面を離れる。両手に光が集まり、量子化した装備を実体化させようとしているのが見て取れた。一夏もたった一つの装備を実体化させ、身構える。

「僕はミーティアって呼んでる」

右手に実体化したアサルトライフルが火を噴いた。

戦いは唐突に始まった。

「ちゃんと最適化してるみたいだね」

キラの、ただ狙って撃つだけの射撃を一夏はかわしつつける。構える、狙う、撃つという緩慢な動作の繰り返し。全く脅威は感じられない。

「当たらないか、やるね」

「手え抜いてる相手に言われてもな！」

真っ直ぐ正面から一夏は飛び込んでいく、銃口もその動きも目で見えるし、そこから外れてしまえばその射撃は全く当たらないのだ。瞬く間に距離を詰め、右手に握った雪片で切り掛かる。

しかし、キラとて正面からの素直な突撃など怖くない。軽いステップで横にかわし、方向を変えようと動きが止まった一夏の眼前に銃口を突き付け……、引き金は引かず雪片に狙いを遷し指に力を入れる。だが、接敵している状態でそんな隙を見せていいはずが無い。しかも銃器を格闘武器にあてがってしまったのだ、即座に切り返しが来る。破壊こそされないものの、アサルトライフルは弾かれてしまった。

三度振るわれる雪片。ライフルを弾いたわずかに無理のある体制から、頭を狙い水平に薙ぐ。お互いの距離が近すぎてシールドバリアは無効、間違いなく絶対防御が発動するだろう一撃を、キラは辛うじて真後ろに倒れ込みながら跳ぶことで回避した。一夏は追うことが出来ず、二人の間に大きく距離が開く。

「惜しかったね一夏」

「そうでもなかったと思うけどな」

その距離20メートル。場は静かに膠着した。

『仕切り直し……、といった感じですね。ライフル一つ分ヒビキ君が不利でしょうか』

『いや、仮にもラファール・リヴァイヴだ、そうはなるまい。しかしヒビキの動きは随分素人臭いな』

停滞した場に、観戦者達が呟きを漏らす。教師達は単純な戦力を量りはじめた。今の攻防だけで全てがわかるわけでも無いが、キラの戦士としての技能は確かに一夏に劣っていた。その様は素人が初めて手にした銃器に振り回されているようにすら見える。

『このペースなら織斑君がヒビキ君を下すことになりそうですね』

『反応は悪くないが……、今後の訓練次第か』
概ね、キラの評価は低い。

「一夏め、日々の鍛練を怠るから剣が乱れ必勝の機会を逃すのだ」
対して篤は一夏の不手際を口にする。

最後雪片を振り抜いたとき、ライフルを弾いたときの無理な姿勢のせいで、力を乗せ切ることが出来ず、結果逃げ切れず追撃も出来なかった。その有様はかつて同門として切磋琢磨した身としては、許容しがたい無様だったのだろう。徹底的に基礎から叩き込んでやるー、だのと息巻いている。

「グリップが甘い、動作が遅い、狙いが単調、銃器を扱うのは初めて……？ いえ、教室での所作は堂に入っていました」

セシリアは一人モニターに見入っている。

「反応速度だけは一級でしたが、まさかそれだけではありませんわよね？ なにを狙ってるんですのキラ・ヒビキ」

少しだけ、ほんの少しだけ彼女は動悸を覚えていた。既にモニターの中の二人は動きだし、舞台は地上から空中へと移りつつある。

『……それにしても』

ふと山田真耶は呟いた。

『最初に振りかぶったとき雪片が光ったのは、何だったんでしょう』

「くそっ！ 止まれキラ！」

「止まるわけないでしょ」

戦いは一方的な展開になっていた。一夏が追い攻撃する、キラは逃げ距離を開ける。機動力の差なのかキラは逃げ切ることが出来ない。

だがそれはあくまで現状の一面でしかない。実際に困窮しているのは、一夏の方だった。いつまでたっても機動力で下回る相手に武器が届かないのだ。距離が開く、追いつく、武器を振りかざす、相手が避ける、武器を振り下ろす、また距離が開く。武器を振りかざしたまま追えば、相手の旋回や反転に武器共振り回されて全く追いつ

つけない。どうも立体機動のセンスはキラが圧倒的なようで、一夏の攻撃は牽制にもならない。

振りかざせば真っ直ぐ飛ぶことしか出来ず、下ろせば構える間に逃げられる。それで当たるはずもない。

だが一夏は焦ってはいなかった。右の手の中の雪片が、あと一歩だと訴えている。

左手に感じるはずのない汗を感じた。

『（やっぱり光ってる……、その度に白式のエネルギーが……、整備不良？ それともあの一次移行にはなにか問題が？）

織斑先生』

試合の監視をするのが織斑千冬の仕事なら、試合中の機体のモニターをするのは山田真耶の仕事だ。彼女は白式のエネルギーがほんの僅かずつだが減っていること、そしてそれが雪片の発光と同期していることに気付いた。

その原因がわからず上司に報告しようとしたのだが、

『あのバカものめ、調子に乗っているな』

『え？』

本人はどうやら試合に夢中なようだ。

『左手を握ったり閉じたりしているだろう、幼いときからの癖でな、ああゆうときは大概くだらないミスをする』

『はあ、さすがご姉弟』

左手、山田真耶は心中でそう呟く。そういえばキラは両手で武装を呼び出していた、そう思い当たったのだ。

キラの指もせわしく動いている、だがその動きは、

『キーボード、叩いてるみたいな』

少しずつ、ほんの少しずつだが、キラの避ける動きが間に合わなくなってきた。誰の目にも明らかほど、キラと一夏の距離は狭まりつつある。

「追いついたぜ、キラ」

「上達、早いじゃないか。驚いたよ」

二人の距離は10メートル。もはやキラはそこまでしか一夏を引き離せなくなっていた。

「でも追いついた、は言い過ぎだね」

キラの右手が再び光りだす、新たな武装を展開しようとしている。「させるか！」

飛び出す一夏、逃げるように落ちるように斜め下方へ飛び出すキラ。

まるでチキンレースのように地面に飛び込んでいく二人、いくら白式のスペックが上だといっても、操縦者である一夏に恐怖心があれば力を出しきれはしない。

キラは追いつかれることなく地面激突寸前で反転、ほぼ仰向けのまま地面スレスレを滑るように移動する。その手にあるのは、

「ただ、対戦車ライフルう！？」

対戦車ライフル、今では対物ライフルやアンチマテリアルライフルといった名称が一般的だろうか。通常ならバイポッドによる固定が必要なそれも、ISの手の中になればただのライフルと変わらないうり取り回しとなるのは、先日モンド・グロツソの映像資料でさんざん見た。その威力は二キロ先の人間を両断してあまりあるという。

それらの情報をISのデータベースや己の記憶から引き出した一夏は、自分に向けられた銃口の威に、思わず緊急離脱を選択する。それは最悪と言っていい選択だった。

三度連続で放たれた弾丸を一夏は余裕をもってかわす。そしてそれが、当てに来ていないのだと気付いた。

振り向けばキラはライフルを下ろし地面に立っている。何故？

ミーティアのウィングスラスタが無。無。量子化して収納したと思えない。何故？

「プラスベル！」

名前を呼んで武装を呼び出すのは初心者振る舞いと教本に書

いてあった、だが初めて呼び出すのならそれも許されるだろう。現れるのは一対のウィングスラスタ、消えたものより大きく大きい。菱型のその頂点には三つずつガラス玉のような物がついている。

「やるからには、勝つよ！」

ガラス玉一つ一つが光を放つ。18条の光が一夏を白式を貫いた。かわすことは出来なかった。

「ずっと出力を調整をしてたんだ、本体を狙わないで、一回で落とせる瞬間を」

「一夏！？」

「BT兵器！ そんなはずが！」

観戦していた箒とセシリアが口々に叫ぶ。箒は純粹に一夏を心配し、セシリアは使われた兵器に。二人とも食らい付くようにモニターを見ている。

『ずっと、この瞬間を狙ってたんですかヒビキ君は』

山田真耶の耳にキラの呟きが届いた。彼女は今の攻撃がキラの駆るミーティアのシールドエネルギーを四分の一ほど持って行ったこと、同時に白式の武装やフロートユニット、シールドバリアにしか当たっていないことを観測していた。

『ああ、相性が悪かったな』

後ろで織斑千冬が呟くのを聞き、彼女は全くだと頷いた。なんて相性が悪いのだろう。

画面の中では一夏が真っ直ぐ落ちていく。

なんて運が悪いのだろう、キラ・ヤマト・ヒビキは。

武器を量子化しようとしたキラは、観客のざわめきに顔を上げる。そつえば勝利のコールが無い、と、

「まだ勝負はついてないぜ、キラ」

落ちていったはずの一夏が、未だにISを纏い立っていた。

無傷ではない。左右のフロートユニットには確かに着弾した跡がある。だが微かに噴いている煙を払うように、まだ戦えるというように、一夏は雪片を幾度か振って見せる。

「もうやめてくれ、勝負はついた」

「いや、まだだ」

高さが合った。真っ直ぐ飛び込んで来る一夏に、後退しながらキラは出力を落としたビームを順に見舞う。だが、

「切り裂いた？ ビームコーティングされてる！」

とつさに放った三条の光撃は、一夏の振るう剣に掻き消された。

雪片にはエネルギー攻撃を無効化する機能がある。先の一斉射も幾条かは武器を狙っていた、それを無効化して一夏は生き残ったのだ。

キラの選択肢は二つ、逃げるか、迎撃するか。

逃げるのは厳しい。確かにプラスベルはウイングスラスターを兼ねているが本質は火器だ、加速性能は30%減。間もなく追いつかれて攻撃されるだろう。

では迎撃するか？ これも厳しい。今手にあるのは対戦車ライフル、キラはこれを人に向けることなど出来ない。かといってビームでは掻き消されるのが落ちだ。

「く、この！」

いや、焦るな。迫って来る一夏にビームを放ちながらキラは心中で唱える。

彼は完全に雪片の間合いを記憶していた。そのうえで迎撃できるように、迎撃せざるおえない攻撃をすることはできる。攻撃を迎撃させることで動きを崩し、今まで余裕をもって回避していた一撃を紙一重でかわす。ライフルで振り抜いた雪片を押さえ付け、至近距離からビームを叩き込む。最初の攻防の焼き直し。

キラの左手が踊る。ミーティアのエネルギーが削られ、出力の上がつたビームが放たれる。右肩のフロートユニットに集中した光条

を一夏はキラの思惑通り雪片で切り払う。そうして外へ流れてしまった武器を、キラの望む最高のタイミングで一夏は振り上げた。上段、両手、喰らえば相応のダメージがあるだろうが、避ければ大きな隙を作ることができる。

これで僕の勝ちだ！　そう思い、一夏の顔を見てキラは愕然とする。笑っている。一夏が笑っていた。

白式が太陽のごとく黄金に輝き、

「間合い、間違えてるぜ」

振り上げられた雪片がその刃を展開する。現れるのは光の白刃。その名を正しく雪片式型、輝きを零落白夜という。

キラ・ヤマトは優秀な人間である。身体能力、記憶力、演算能力、反射速度、洞察力、適応力、どれをとっても平均を遥かに上回る。

だが優秀な戦士ではない。

そもそも兵士ですらない彼にとって、戦いとは武器を扱うこと以上の意味をもたない。攻撃一つとっても当たるか当たらないかではなく、流れの中でのいかなる結果が出るか、ということまでシミュレートしてしまっている。故に――

――故に彼は突如間合いを伸ばした雪片二型に全く反応できず、

「っだあああああ！」

「え？」

裂帛の気合いとともに振り下ろされた白刃によって、戦いの幕は降ろされた。

アリーナの観戦者達が歓声を上げる。スピーカーが勝者が織斑一夏であると告げた。エネルギーが切れたISが量子化してしまい、尻餅をついたまま呆然とするキラに一夏は手を差し出す。

「おつかれさま」

「……あ、うん。最後のなに？」

差し出された手を取って立ち上がったキラは、まず敗因を知りたがった。

「よくわからん、零落白夜っていう必殺技らしい。シールドバリアを無効化して相手のエネルギーをゼロにできるんだと」

「そっか、うん。次は負けない」

「おう、俺もまだ特訓で負けた借り、返しきってないからな」
「そっいいながら一夏は振り返る。」

「けどその前に」

「お互いあと一戦、がんばろう」

巨大なディスプレイには『セシリア・オルコット スタンバイ』との文字が浮かんでいた。

第四話 お互い（後書き）

クラス代表戦決定戦編も残すところあと一話となりました。多分。

三人の戦わせ方でだいぶ迷いました。

当初はバトルロワイヤルとか考えていたくらいです。

5秒で断念しましたけど。

キラの戦い方や零落白夜に関する詳細は、今後話の中で書いていきたいと思っています。

感想などお待ちしております。

第五話　力だけが（前書き）

お待たせしました。クラス代表決定戦編の最終話になります。
お察しの通り筆者は説明厨です。そして言い訳厨でもあります。
今回はいつにもまして・・・キャラ崩壊が激しいと思いますが、
ご容赦ください。

第五話 力だけが

セシリア・オルコットは苛立っていた。

望んだ決闘を先送りにされた。これはまあ半分自業自得なのでいい。

織斑一夏の装備が若干以上に相性が悪い。いいだろう敵を選べるはずも無い。

キラ・ヒビキが負けた。実力を把握できているので勝敗は眼中にない。

問題なのは彼が使っていた装備だ。

私人セシリア・オルコットではなく、公人セシリア・オルコットとして、ひいてはティアーズ型ISのパイロットして。イギリスがようやく形にしたシステムを何故彼が扱っているのかを知らなければいけない。

「キラ・ヒビキはまだですよー！」

キラ・ヤマトは焦っていた。

戦いに負けたことは気にしていない。なんといつても場所が悪かった。

最後棒立ちで喰らってしまったのもしょうがない。だって初めて見た装備だ。

スピーカーからセシリアの叫びが聞こえる。これもまあ許容範囲だ。

問題は自分のISの状態。ダメージレベルB。左首付け根から右太股までざっくり斬られた装甲、絶対防御の偉大さがよくわかった。「エネルギー補給が永遠に終わらなきゃいいのに」

この状態でIS動かしたら、シンの機嫌を確実に損ねる……。キラは心中で深い溜め息をついた。

織斑一夏はワクワクしていた。

実のところをいえば、彼が一番気にしていたのはセシリアだった。当然それは女性としての興味ではない。

彼がいつか守れるようになりたい人、織斑千冬。そのためには強くならねばならない。

もちろん本人に挑むわけにも行かない。

だからセシリア・オルコットは、現在の彼が見るべき明確な基準点だった。

「早く始まらねーかな」

『さっきの試合良かったですね』

『そうだな』

『ヒビキ君の武装、オリジナルですかね』

『そうだな』

『セシリアさん焦れてますね』

『そうだな』

『あの武装と相性悪そうですね』

『そうだな』

『……授業時間、足りるんでしょうか』

『……そうだな』

「さんざん待たせてくれましたわね！」

「ダメージが結構大きくてね」

一夏とキラの試合が終わって十数分後、キラとセシリアはようやくアリーナ上空で対峙した。キラの駆るミーティアは、装甲の切り裂かれた部分が痛々しい。

「あら、どうしてもというならハンデを差し上げてもよくってよ？」

「僕は戦いたくなんかないんだ」

「却下ですわ」

溜め息をつくキラ。わかつてはいた、駄目元だった。それでも断られるとても困る。かくなる上は出来るだけ被弾を減らすしかない、そう覚悟を決めて地に足を着けた。二対四枚の翼が消えてもう一つの翼が呼び出される。

セシリアの態度から見下ろすような余裕が消え、目つきが険しくなる。

「その兵装……」

「え？」

「それはBT兵器ですの？」

BT兵器、簡単にいえば手動での操作を必要としない思考制御型の砲門。砲は固定されて砲口の向きと発射だけを制御するタイプと砲そのものが独立機動するタイプのもの——俗に言うビット——がある。ISの移動の基本であるスラスタ制御がそもそもこれで行われているのだが、方向や速度のイメージを読み取って勝手に演算制御してくれるそれとは違い、ビットタイプの制御には明確で具体的なイメージと高度な演算が必要になる。

（CEのドラグーンは手動及びAI制御なので含まれないが、UCのサイコミュ兵器はこれに含んでもいいかもしれない）

端的に言えばビット一台につきIS一機並のイメージと演算が必要になる。

キラの使うプラスベルという兵装は固定砲だが、その数は18。制御の難しさが数に比例するわけではないが、間違いなく驚異だ。もちろん負ければ、祖国のBT兵器開発の先駆けという名に傷がつく。

だがそれはまだマシな結末。もし違うのなら……、

「BT兵器？ それはイギリスが試作したばかりの第三世代兵器じゃないか」

「そうですか。でしたら」

ミーティアの背でプラスベルの実体化が完了し、セシリアはスタ

ーライトMk?ビームライフルを手にブルー・ティアーズを空へと
駆る。

「ここで潰させて貰いますわ!」

例えばサメとシャチ。例えば蝙蝠と梟。例えばイモリとヤモリ。
例えば始祖鳥とプテラノドン。違う道をたどり同じ答えに行き着い
たというなら。

プテラノドンが始祖鳥はこの一戦で決まる。負けるわけには行
かないのだ、絶対に。

遙か空へ加速していくブルー・ティアーズ。キラは追わない。た
だ翼を、プラスベルの砲門を、いつかセシリアが到達するであろう
一点に向ける。ブルー・ティアーズは白式と比べるとスマートで、
肩のフロートユニットも小さく狙いにくい。だからより正確な攻撃
が必要になる。

もちろん平時なら初めて戦う相手の軌道予測などできようはずも
無い。

だが空へ駆け上がっていく彼女が、戦い始めた頃の自分と同じく
らしい年齢であること、ブライドが高く戦いに矜持を持っているこ
と、そしてとても焦れていて早く戦いたいのだということを、彼は
理解していた。

いつでも回避行動を取れるように足を軽く開き、角度を固定した
プラスベルに干渉しないように一対のウィングスラスターを呼び出
す。ひたすらに左手を躍らせ、ビームを誘導する偏光レンズの角度
を調整しつつける。出力をあげ小さく穿つか、出力を下げ面ごと焼
き払うのか? 例え避けられるとしても万が一が無いように、出力
を下げ面を焼くことにする。距離は遠いが減衰率の計算も終わって
いる。

まるで打ち上げ花火が炸裂する瞬間を待つように、キラはその瞬
間を待った。

「狙ってますわね」

セシリア・オルコットは気付いていた。彼が何故先の戦いで逃げるに徹していたのか、彼が何故今攻撃して来ないか。彼女がその理由に気付いていることを、彼が察したことを。

キラ・ヒビキは生身の人間に武器を向けられない。

シールドバリアとか絶対防御とか、観客席のバリアとか、そういった物は彼の眼中にはない。純粹に、自分が人の命に武器を向けることが許せないのだ。

だから アサルトライフルや対戦車ライフルは簡単にかわされ、二人で空を飛び回っていた時は武器を使えず、最後は急降下して戦場を水平方向ではなく垂直方向にするに至った。白式を狙うときも主な攻撃部位は両肩のフロートユニットと武器、シールドバリアが球形であるが故の空白部分になる。

セシリアは知らないが、彼が他人の命を脅かすのは、自分や大切な人の命が危険にさらされた時のみである。

だがそれを理解した上で、彼女はその隙を突こう等とは思わないというよりそれでは意味が無い。彼女はキラに勝たなければならぬ、違う。ブルー・ティアーズでプラスベルに勝たなければならぬのだ。

砲門の数等言い訳にはならない。制御できる数も商品だろう。今あるBT兵器で、今ある数で勝って見せなければならぬ。

終点が見える。角度の上で屋根が切れる場所。

ボーダーラインを超えた瞬間、セシリアは反転してありったけのビームを撃ち込んだ。

「今だ！」

ブルー・ティアーズがそこに到達したのを見たとき、一夏は思わずそう叫んでいた。同時にモニターの中のキラが十八条の光線を乱打する。しかしセシリアはそれがわかっていたように、反転。足の甲でなにかにぶら下がるように、と言えればいいだろうか？ 逆立ち

した姿勢でそのほとんどをかわし、四条の細い光線と一条の太い光線を雨のように降らせる。

だがキラもある程度想定はしていた。即座に移動して被弾を最小に抑える、同時にミーティアの背から一対の翼が消えた。

「オルコットは上昇するとき手を抜いていたようだな」

「反転、速かったしな」

対してセシリアはこれをビットを飛ばすことで追撃、だがキラはステップで、つまりその足で駆け回ること回避しビームの乱打で反撃する。その激しさは白式と戦っていた時とは比べものにならない。

『ヒビキ君、やりやすそうですね』

『いや、そうでも無いだろう。あれは自棄に近いな』

撃つ瞬間、獲物を狙って攻撃する瞬間、ブルー・ティアーズのビットも、キラの駆るミーティアも、わずかな時間だが例外無く動きが止まる。だがどちらにも複数持つ砲で並列して銃撃を行うことができる、という強味がある。その程度の隙を突かれることはない。手数はこの際関係なくなっている、例えばブルー・ティアーズのビットを一つ落としても、そのかわり残り三機、それを落としても本体からの攻撃を喰らうことになる。それも直撃をだ。本体から切り離されたビットを狙うのはキラとしてはむしろやりやすいのだが、同時に直撃を喰らうのがわかっていて攻撃だけに集中することができると彼は肝が据わっていない。

肉を斬らせて骨を断つ。もしキラにそんな決断ができれば、勝敗はともかく決着はすぐにでもつくだろうが。セシリアはひたすらにキラの反応が遠い場所を探り、キラはセシリアがわずかでも攻撃の手を緩める瞬間を待つ。闘いは耐久戦の様相を呈していた。

「よく避けるじゃありませんか」

セシリアはビットを踊らせながら軽く唇を噛む。半ばわかってはいたが、ここまで当たらないとは思わなかった。というのが彼女の

本音だ。ビットを落とされないためには同時攻撃を控えなければならぬ、それは間違いないが、もしそんな枷がなかったとしても当てられないかもしれない。まっとうに戦っても勝てないかもしれないと、彼女は弱気になっていた。

無理も無い。キラはビームをその足で回避しているのだ、並の人間のすることではなかった。状況が拮抗しているのは、一重に被弾を恐れ、人間を狙うことが出来ないキラの臆病さによる。

だがそれも天の差配だろう。

天は二物を与えずという言葉もある。強いものが勝つのも弱いものが負けるわけでも無い。勝つ人間が勝つべくして勝つのだと、己は勝利する人間なのだと彼女は心中で唱える。

「あれだけ踊れる殿方は本国にもいないかも知れませんか」

あの大口に相応しい実力だ、等とは露とも思わない。むしろ弱すぎるくらいだ。だが次は決闘ではなくダンスに誘うのも悪くない。きっと楽しいだろう。そう呟いて彼女は微笑む。それはやせ我慢や空元気なのかもしれないが、確かな笑みだった。

「終幕といきましょう、ブルー・ティアーズ」

いつまでたつても隙を見せないブルー・ティアーズに、キラは焦りと苛立ちを感じていた。

いや、隙はいくらでもある。

まず本体が完全に無防備になっている。だが本体に狙いを定めればビットから集中砲火を喰らうだろう。

ビットの軌道が長いサイクルではあるものの単調だ。だが攻撃のタイミングだけは違うのでまとめて落とせはしない。

プラスベルは未完成の装備だ。

まずサイズのせいで初期装備のウィングスラスターと併用しにくいにも関わらず、スラスターとしての性能は無いに等しい。具体的には初期装備の二対四翼に比べ、旋回性能は90%減、最高速度は半分、辛うじて加速性能を3割減に抑えたから、一撃離脱は出来な

いことも無い。本気で離脱する気なら、即座に初期装備に切り替えられなければ意味が無いのだが。

加えて操作性が悪い。簡単に言えばビーム砲の口に偏光レンズを並べているだけなのだが、二つのウィングスラスターの角度と、六つのビーム砲の出力と、18のレンズの角度を全て手で入力しなければならぬ。ちなみに入力した結果をシミュレートしてくれるプログラム等という便利な物は積んでいない。というかそんなものを見ている時間は実戦では無いだろう。なお脳内でシミュレートしたものをフィードバックするのがBT兵器なので、手順がまるまる逆とも言える。

これを使つて戦えているのは、一重にキラが優秀だからという一点につきる。

だがそれにも限界がある。

まずセシリアの攻撃を避けるために、スラスターを使わず駆け回っているという肉体的疲労。同時に、一歩動く度に再計算しなければならぬプラスベル操作のための脳的疲労。焦りや苛立ちはひたすらにそれを助長する。それでもパフォーマンズが落ちないのはいかにもスーパーコーディネーターの面目躍如だろう。しかし改めて言おう、もはや限界なのだ。

「終幕といきましょう、ブルー・ティアーズ」

その囁くような言葉が、広いアリーナの何人の耳に入ったかはわからない。だが彼女がその言葉を口にしたとき、確かにキラは微笑んだ。

ようやく戦いが終わる、と。

セシリアがビットをその背に戻した。必然、キラの攻撃の手も止まる。コール、ISの装備を通しての通信が入る。声の主は当然対戦相手で、

『どうやら貴方を侮っていたようです。たまたま手に入れた力に調子に乗っているだけの男だと』

その声にキラは思わず彼女を見上げた、まるで重力の方向が違うように真つすぐ立って大地を見ている彼女の手に、すでにスターライトMk?は無い。

その手はまるでスカートの裾をつまむようにふわりと開き、装甲の嵩張る脚を器用に組んだ彼女は優雅に一礼して見せる。

『改めて名乗りますわね』

そしてその手の動きに合わせふわりと、まるでスカートが広がるように、背中と腰のスラスターが開く。その場違いな有様に、キラの思考が一瞬停止した。

『セシリア・オルコット。イギリス代表候補生ですわ』

否、スラスターではない。腰に下げられた二つの短筒が向けられた瞬間、キラの思考は帰還を果たし弾かれたように回避行動をとるハズレ。かつて駆った彼の自機とは違い、その中身はレールガンではなくミサイル。

反射的に右手にアサルトライフルを実体可させつつ、プラスベルからビームを発射しミサイルを迎撃。同時にハイパーセンサーで大気の流動を計測、

「煙幕なんて!」

案の定迫つて来る追撃のミサイルを、アサルトライフルで迎撃。同時にプラスベルの出力、狙いをコントロールする。

「インターセプター!」

爆煙の中から聞こえた声を頼りに速度と位置を再計算。視認。ドンプシヤ! 心の中で快哉をあげつつフルバースト。しかし放られたスターライトMk?に命中、一撃撃破にはいたらない。

「終わりですわ!」

零距离への侵入を許す。胸元に突き込まれる白刃。許せば絶対防御が発動し、たちどころにエネルギーは尽きるだろう。

だがキラ・ヤマトは終わらない。

ライフルで刃を受け流し、突き込んできた右手を取りひねりあげる。

「勘違いされやすいけど、格闘戦は苦手じゃない……ずぐ！」

背中に衝撃。プラスベルとの接続が途絶える。プラスベルが落ちたことで障害物が無くなったハイパーセンサーの360度視界に、二つだけ浮かんだビットが見える。

「それは、本体と同時に動かせないはず」

「ブルー・ティアーズが本体とビットを平行処理出来ない理由は二つありますの」

一つは、単純に処理が追いつかないこと。だがこれはビットの一つを大型のスラスターにして、本体に接続すればすむだろう。

もう一つが肝心な理由。ビットを操作するとき、その移動のイメージはビットを中心にした相対座標ではなく、本体を中心にした絶対座標で行っていること。もし本体とビットを同時に動かすなら、本体の動きをビットの移動速度から差し引き、計算しなければならぬ。本体とビットが一定の図形を保つ意味など無いし、緩急をつければその演算は複雑化の一途をたどる。

これを考えずにビットを掴んだままビットを操作して、知恵熱をだした経験も彼女にはあったりする。

さて要点をまとめよう。本体の移動が外的要因であり、ビットの動きが極めて単純である。

この条件を満たせば、本体移動中もビットの操作は可能である。

「自由落下か！」

「半端な知識があだになりましたわね」

自由落下中、その速度がビットの限界を超えないかぎり、一定の高さを保たせることは可能。本体を囲にした捨て身の奇襲攻撃は、見事キラの隙を突き刺した。

だがセシリアはここで終わりだ。彼女が次の引き金を引くより早く、キラはその手の引き金を引くことができる。この距離なら慎重な狙いなどいらぬ、脚でもスラスターでも好きな場所に銃口を突き付けばいい。まして腕をひねりあげて拘束しているのだ。

「撃ちませんか？」

「勝負はついたはずだ」

「ええ」

「降伏は」

「しませんわ。私は勝ちましたから」

引き金が引かれた。

『ブルー・ティアーズ、エネルギーゼロ。勝者キラ・ヤマト・ヒビキ』

『棄権、ですか？』

「ええ」

第三アリーナピット。セシリアはタオルを頭を埋めていた。

「武装がもうビット型二つとインタセプターしか残ってませんもの」
思い出すのは先の試合、最後の瞬間。

「勝っても来週のクラス代表決定戦までに調整が間に合いませんわ」
同タイプ武装の意地でプラスベル落とした。

「それに授業時間をとくに過ぎていてはなくて？」

『あはは、そうなんですよね……』

そんなわけが無い。狙えるなら胴体なり頭なりを狙って絶対防御を發動させる場面だ。ならばなぜか？ 他に狙う場所が無かったからだ。

あの瞬間ビットのあつた位置こそベストだった。キラ・ヒビキの持つ馬鹿げた空間を認識する能力の、慣れない武装を使っているからこその極小にして唯一の死角。そこから狙える中で最も効果的だったのがプラスベルのジョイントだった。

『それでは第三試合はセシリアさんの棄権として処理しますね』

試合に負けて勝負に勝った。それは虚栄だ。だがセシリアはそれを甘受しなければならない。

『あれ、セシリアさん？』

「教室に戻る前にシャワーを浴びてきます」
『わかりました。急いでくださいね』

ざあざあと水がタイルを打つ音がする。どうやら先客がいるらしい。そのまま気にせず入ろうとして、セシリアははたと思い当たった。今ここに先客がいるとしたら、それはキラが一夏しかありえないだろう。別にISスーツを脱がずに軽くシャワーを浴びるだけのつもりなので、構わないといえば構わないのだが。

さっき戦ったばかりの相手と会うには早過ぎるだろうと、わずかばかり腰がひけた。

待とうか、別のところに行こうか、諦めるか、探りを入れようか、そう少し頭を巡らせる。と、声が聞こえてきた。

「負けちゃった……、か」

それはキラだった。そのつぶやきからして、近くには少なくとも一夏はいないのだろう。キラはISスーツのまま、ただただシャワーにうたれていた。

「しょうがないよね、別に、命がかかってたわけじゃないし」

ポツリと声が漏れた。

「武器の相性も悪かったみたいだし」

誰かに言い訳するように、

「零落白夜なんて唯一仕様じゃないか」

いや、自分自身にか。

「オルコットさんは代表候補生だよ」

ギリリと、セシリアは我知らず奥歯を噛み締める。

「経験もISに乗ってる時間も違う」

ギリリとその手を拳へと握り締める。

「形の上でも勝てて良かった」

セシリアは頭が空っぽになった気がした。

既に拳は握られている。ならばたった一つ動作があれば良い。

ツガン！

拳が壁にたたき付けられる。

「そんなわけ……」

キラの。

「そんなわけ、ない！」

もう一度。二度。三度。むしろ自分自身を痛め付けるようにキラは拳を壁にたたき付ける。

ガリリと硬質な物が削れる嫌な音がする。ひとりでに展開したラファール・リヴァイヴの装甲がキラの手を覆い、シャワー室のタイルを削っていた。

「なにが、力、だけが、僕の全て、じゃ、無い、だ、偉そうに！
こんなに、こんなに悔しいのに！ その力だつて！ 負けてばかり、
じゃないか！」

苛立ちよりも嗚咽の混じる悲鳴のような声。

「あの、時は、迷ってた？ 迷いなんか、なくなつて！ メサイア、
で、負け、負けたじゃないか！ くそ！ くそ！」

メサイアでの敗北、ほぼ痛み分けなのだが。慰めてくれる人も言い訳をする相手もない一年間で、彼の心に澱のように溜まっていたそれは、続けて敗北したことで出来た傷から膿のように吹き出していた。

「負けたら、なにも、守れない！」

縋るように壁に押し付けられた手は、ただタイルを削る。膝が床についた。

「負けたら、なにも言えない」

ついで床まで下りてきた手を、キラは静かに握り締める。

「次は勝つ、勝って見せる」

ゆっくりと上に伸ばした手が、シャワーの詮掘む。

ギッ

シャワーが止まった。タオルを被り、キラは個室を出ていく。着替えを持っていないから、多分更衣室かロッカールームに行くのだろう。あるいはアス力を迎えに行くのかもしれない。

それを見送ったセシリアは隠れていたカーテンの影から出て、そっとキラのいたシャワールームに入った。詮を捻りシャワーを浴びる。

壁には真新しい傷がいくつも刻まれている。殴った後、放射状のひび割れ、五指の爪痕。

「キラ・ヒビキ」

セシリアはその爪痕にそっと手をあわせた。

深い闇の中、いや、けして明かりの無い暗がり等ではない。だが、それは闇の中としか言いようの無い場所だった。

そこでは一人の女性が、いくつものディスプレイに囲まれキーボードを叩いていた。

「ふふん、今日はいっくんのはれぶたいー……、と」

なにかを見つけたように手が止まる。

「あれあれー？ 誰かな誰かなー、いっくんの白式に不正アクセスなんて悪い子はー？」

キーボードを叩く速度に拍車がかかり、ディスプレイの三分の一が文字だけで覆われた。黒地に踊る赤い文字は、お世辞にも穏やかではない。

「悪い子にはお仕置き……、っといっくんの試合が始まっちゃうね！ 録画準備もおっけい！ さあさあ」

手を休めず、だがその目は食いつくようにディスプレイの一つに注がれる。

「あれ？ なにこれ」

その目がにわかに鋭くなる。

「なにこの紅いの？　なんで箒ちゃんを差し置いていつくんと踊ってるのかな君は？　教えてもらうよ……、アクセス拒否！？」

ギリギリと食いしばった歯が音を立て、

「そっか、反抗期だね！」

笑顔に切り替わる。

「もう、お母さんに隠し事なんて可愛いやつめ！　かわいいーかわいーかわいいーなあもう！」

キラキラと笑いながら彼女は足をばたつかせた。同時に頭についている二つ折りの携帯電話のような物が二つ――兎の耳を模している？――がパタパタと開閉する。

だがその目は笑ってなどいない。

「可愛い子は千尋の谷に突き落とせ、だっけ？　おかあさん、応援するよ」

スツと部屋から明かりが消えた。

「頑張つてね」

後には深い闇が残る。

T o b e C o n t i n u e d . . .

第五話 力だけが（後書き）

クラス代表決定戦も今回で終わりです。

若干不完全燃焼の方もいるでしょうね。申し訳ありませんが筆者はこういう人間なのです。バトルなんて全く書けません。

キラのキャラが違う、キラが弱すぎる、セシリアのキャラが違う、ちよろ可愛さんが強すぎるなど苦情は多々あると思いますが、とりあえずちよろ可愛さんが可愛くない以外の苦情は聞きません！
嘘です、ちゃんと参考にするんで感想あったらどしどし下さい。

ともあれ次回は番外編！

- 1 . 第と一夏のすれ違いウィークデー
- 2 . キラ・ヤマトの優雅な休日
- 3 . 真耶と千冬の嫁姑日記

以上3本でお送りします！ 嘘です。3本目は恐れ多すぎて書けません。上の二本で勘弁してください。

さて、余白で少々キラの機体の詳細をばまとめさせていただきます。

機体設定など。

呼称：ミーティア

機種名：ラファール・リヴァイヴ（一次移行）

操縦者：キラ・ヤマト・ヒビキ

カラー：薄紅／紅

装備：

・初期装備

五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》

山田先生のラファール・リヴァイヴにも搭載されているアサルトライフル。

小型近接ブレード《ブレード・スライサー》

シャルルのラファール・リヴァイヴ・カスタム？にも搭載されている刃物。

多方向加速推進翼（マルチロールスラスター）×4

菱形で二対四枚の翼。これが無ければラファール・リヴァイヴじゃないだろJK。

・後付け装備

左腕用仮想キーボード《ゴーストライター*自称》

キラの自作装備。実はこれで授業中もこっそりPCをいじってる。左手に装備する手袋のような形のキーボード（？）少なくとも板じゃない。

戦闘中は主にプラスベルの入力補助に使う。

九十八口径対物ライフル《XM-109カスタム（コブラ砲*自称）》

カスタムと言ってもバレルが長くなってるだけ。メリットは無い。見た目重視。

この口径の弾丸火薬でとばすとか……。筆者には対物ではなく怪物に見えている。

なおサイコガンではない。キラはアメリカ生活で某ロボ巡査のファンになったのだ。

広域制圧ビーム砲搭載推進翼《プラスベル*自称》

キラがシンの協力の下に制作した18門のビーム砲口を持つ多方向加速推進翼。

初期装備（二対四翼）と比べ加速性能30%減、旋回性能90%減、最大速度50%減。

イメージインターフェースは積んでないので、ゴーストライター

によって制御される。

水鉄砲《唐辛子水入り》

AK-47の銃床を取り外し、全体のサイズを2/3ほどにスケールダウンした外見。

見る人が見ればすぐ偽物と気づく。中身の交換を最後にしたのは……。

ちなみにAK-47の通称はカラシニコフだが筆者に他意は無い。

備考：

頭部ハイパーセンサーはゴーグルのような形状二本黄色い角があり、前頭部についている。

胴体部分に装甲が追加されている、カラーリングが紅くなっている以外大きな変化は無い。

基本状態で一次移行したため装備も初期装備に後付け装備をのせるしか無い。

そのせいで計三対六枚の併用できないウィングスラスタを積んでいる事になる。

正直パススロットの無駄。本来ならプラスベルに干渉しないスラスタを積みたい。

水鉄砲の飛距離は20メートルほど。それがスーパーコーディネイタークオリティー。

ちなみに対物ライフルは威圧感を与える装備、というチョイスなので、

トビーレミントンとどちらにするかで相当迷った。

威圧感はやっぱトビーレミントンの方が大きいよね？ 百十口径だしあれ。

番外編：第一夏のすれ違いウィークデー（前書き）

「織斑先生」

「山田先生か、どうした？」

「職員会議の間、私が教壇に立つんですよ？」

「そうだが」

「大丈夫なんでしょうか」

「大丈夫だ、君になら任せられる」

「が、がんばります」

「ああ、家の愚弟……、いや、学園唯一の男がいるクラスだからな、色々苦労もあると思うが」

「あ、織斑先生の弟さんですね！ はい、がんばります！」

「……山田先生」

「なんですかこれ？」

「一年生の名簿だ、クラス表もついている」

「はい？」

「玄関で生徒が迷わないように案内してくれ」

「え？ 今からですか？」

「すぐにだ」

番外編：第一夏のすれ違いウィークデー

I waited a long time, but . . .

新学期。

その言葉の響きだけで胸を踊らせる人間もいれば、同じ数だけうんざりした気持ちになる人間もいるだろう。

それはもはや生れついでにの業みみたいなモノで、どうこうしようと思つてなるものではない。ここにいます篠ノ乃箒もつい一月ほど前までは今日という逃れられない日を呪う後者の一員だった。……つい一月ほど前までは、である。今は違う。

彼女にとって今日は、六年ぶりに幼馴染みと再開するチャンスなのだ。いや、訂正しよう。彼女は今日幼馴染みと再開する。既にそう決めている。

そこでふと彼女は自身の顔色が心配になった。

なにせ昨日は周囲の熱気に当てられてよく眠れなかった。朝見た鏡の中の自分は本当に酷かったと思ひ返す。

したことも無い化粧で誤魔化すか否かを熟考したほどだ。三度化粧水入りの瓶を手に取り、三度保湿クリームを指にのせ、三度鏡台の前に座り、結局鏡台に化粧水の瓶をたたき付けるに至った。

あきらめて朝の鍛練を済ましシャワーを浴びて、再び鏡を見たときにはいつも通りの顔色になっていたのは呆れ返ることになったのだが。

だが思い返せば万全とは言いがたい顔色だったかもしれない。時間が経つにつれ不安になって来る。かといってこの教室で手鏡を出すのもどうだろう？ 浮ついた人間だとは思わたく無。ではトイレにでも立つか？ その間に入れ違いで幼馴染みが教室に来ていたら、きつといういろいろやりきれない気分になるだろう。

ぐるぐるとやくたいも無いことで頭を巡らせる彼女の耳に、カツ

カツと足音が届いた。

ガララという音が続く。

教室中の視線が開かれた扉に注がれていた。一斉に向けられる視線に怯えた様子の少女が一人、おっかなびつくり入ってきた。

ため息とともに箒は正面に向き直った。次は反応しない、そう心に決める。

そうだ気にすることなど無い。あれは昔から教室に入る度に挨拶するような人間だった。その声さえ気にしてれば言い。さあ早く来い一夏！ そう期待に胸を踊らせながらも頼杖について窓の外を眺める姿はいかにも乙女なのだが。

学内を歩くだけで視線に晒されつづけた一夏がことさら注意を引くことをするはずもなく。

（さあ来い一夏！）

副担任が教壇に昇るまで、その頼杖が外れることはなかった。

2・They were 2！

気が付けば既に彼はいた。教壇にたった副担任（山田真耶と名乗っていた）に視線を移したとき、確かにその前の席に一夏は座っていた。やはり知り合いが全くいない環境に困窮しているらしい、表情からそう彼女は判断した。

全く私を裏切るからだ。彼女は心中でひとり呟く。ちゃんと挨拶をして入ってくれば、それに返事をしてやったものを。いまさら遅いが助けを求めるなら考えてやらんでも……、等と都合の良いことを考えていた彼女だったが、ふとその視線があらぬ方向に向かっていることに気づく。

背後、真後ろ、しかも右肩ごしに振り向いている。つまり箒を見ようとしてなにかに気を取られたわけでも無い。

（なんだ、誰かいるのか？）

そう疑問に思い静かに彼の視線を辿る。女生徒、女生徒、女生徒、
じよせ……、見つけた。

もう一人の男。

誰だあれは？ よりも先に邪魔ものめ！ が彼女の頭に浮かんだ。
奴さえいなければ一夏は私に気付いただろう。苛立ち混じりの思
考でまるで怨敵のように相手を睨む。が、すぐにその思考は何故あ
んな男より私を頼らない！ にシフトした。

男が顔をうつむかせ視線をそらしたのを見て、それ見たことかと
快哉をあげる。私を頼らないからそうなるのだ、と。

そんなことを考えていたから。

自分でもそれを間違っていると感じたから。

彼に見られたとき彼女は思わず顔を背けてしまった。背けた後に
フンと鼻を鳴らしてみる。

少し自分が情けなかった。

3・Taking a bath is refreshment.

「結局今日はあまり話が出来なかったな」

シャワーを浴びながら、篠ノ乃箒はうなだれていた。

せっかく幼馴染みと再開し同じクラスになれたというのに、一日
あつて会話らしい会話が出来なかったからだ。

それもこれもあいつが悪い。

突然現れた二人目の男性IS操縦者、キラ・ヒビキと名乗る男。

彼女にとって非常に腹立たしいことに、彼が一夏の関心をほとん
ど持って行ってしまった。昼に上級生がISの事を教えよう等と言
ってこなをかけに来たのを、心ここにあらずといった風情であしら
ったときは胸がすいたものが、彼女自身も拒否されてしまったは意
味が無い。

シャワーを止め、髪を指で梳きリンスを馴染ませながら思いを馳

せる。

——この髪だって、いつかくれたリボンが映えるようにと手入れを欠かしたことはない。そのリボンだって痛まないように手洗いでアイロンをかけて陰干しして……、さすがに今は使えないししまっているのだけど、

『6年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ』

とか！、

『お前の事を忘れるはず無いだろ？』

だとか！

もはやこれは相思相愛なのでは無いか、とまで記憶を美化し、それでも緩む頬を抑える。仮にも幼馴染みなのだ、織斑一夏がそんなに甘くは無いことはよくわかっていた。

シャワーで軽く髪を流し、蛇口を閉める。まずバスタオルを一つ身体に巻き、もうひとつ取って髪に巻く。いつ同室の相手があるかわからないし、流石にこの格好で迎えるわけにもいくまいと部屋着を着てから、髪にドライヤーを当てる。

その最中、唐突にドアが開いた。

「む、同室のになったものか？ すまない、シャワーを浴びたばかりで」

振り向き挨拶をしようとして、

「ああ、相部屋って箒だったのか」

脳天気な声に言葉が詰まる。

「女子と相部屋って聞いたときは焦ったけど、少し安心したよ」

「いい、い、一夏？」

「おう？」

そこにいたのはつい先程まで彼女が思っていた相手、織斑一夏その人だった。

「一夏、だな」

「なんだよ二回も？」

深呼吸。

「いや、いい。お前が私の同居人だと言うのか」

「ああ。もしかして箒は嫌か？　なら寮長の所に直談判に行こうと思っただけど」

「お前はいいのか？」

「箒ならいいよ」

その言葉に、肩の力を抜く。いれっぱなしだったドライヤーのスイッチを切り、鏡台をはなれると、部屋のおくのベッドに腰掛けた。「あ、奥のはオレが狙ってたのに！」

「二週間前から私が先約だ。諦めろ」

そういわれて、一夏は手前のベッドに腰掛ける。一夏がそうであるかは定かではないが、二週間女性が使っていたベッドを本人を前にして使う度胸は、一般男性には無いだろう。伸びをするように両手をあげ、そのままベッドに倒れ込み……、思い出したようにガバリと起き上がった。

「そういえば箒、シャワー浴びちゃったんだよな」

「あ、ああ。どうかしたか？」

怪訝そうに聞き返す箒。一夏は顎に手を当てしみじみと言葉を続ける。

「いや、大浴場の場所がわからないからさ、箒が行くなら教えてもらおうと思ったんだが」

「ほう……？」

若干背を向けているためか彼は、ゆらりと立ち上がった彼女に気付かない。

「一人で行くしか無いか」

「あくまで部活の汗を流しただけだから、大浴場に行く予定が無いでも無いが、一つ聞こう一夏。何のために行くのだ？」

「そりゃ、入るためだろ」

「そうかそうか」

完璧に足音を殺し彼の背後に立つ。右手には木刀。ここにいたっても彼は気付かない。

「6年見ない間に落ちるところまで落ちたな、女性しかない浴場でなにをする気か知らないが……」

「え、あ、え？」

ここにいたりようやく背後の存在に気付く一夏、その目は木刀を捕らえ、耳は怒声を捕らえ、

「成敗！」

その二つが脳で結実する前に彼の意識は落ちた。

4 . P l e a s e , c h o o s e ! B a t h , d i n n e r
o r m (y l o v) e ?

「一夏、私はもうあがったし、風呂を使っても構わないぞ」

「ああ、切りが良いとこまで読んだら入る」

「一夏、夕食の時間だし、今から食堂に行こうと思うだが」

「ああ、この穴埋め問題が出来たら行くよ」

「一夏、明日も早いし、そろそろ電気を消すが構わないか」

「ああ、こっちにもスタンドがあるからな」

「一夏、わからないことがあれば、教えてやってもいいぞ」

「ああ、わからないことがあれば聞くかも」

一事が万事この調子であった。篠ノ乃箒が部屋に帰ると、いつも一夏は自室の机かベッドでテキストにかじりついている。

なにを言っても答えは生返事で、行動が少々緩慢。

一度は食堂で貰ってきた食事を部屋で一緒にとろうとしたが、テキストからほとんど目を離さずいろいろ危なかった。それでも身になっっていれば、本人のためと思うこともできる。

だが、全く身になっていない。

穴埋め問題のテキストは間違いだらけだし、参考にしようとしている項目が少々外れている。同じ場所を三度も四度も読み返す。勉強しているのはポーズなのだ。流石に彼を思う身として見逃すことは出来なかった。

「一夏、ちよつといいか」

「ああ、教室に戻ってからでもいいか？」

「いや、すぐにだ」

昼休み、昼食をすまし教室に戻る途中も、テキストから全く目を離す気配のない一夏の袖を掴み強引に体育館へとひいていく。

あらかじめ申請をしておいたので、特に人はいない。

「ちよ、なんだよいきなり」

「見たところこの二日、それを読むことしかしていないな。ISは機械だし確かに座学も必要かもしれない」

用意していた竹刀を投げ渡す。

「だがその身をもって動かすものだ、どれだけできるか見てやろう」

10分後、一夏は体育館の床に正座していた。これ以上は無駄な怪我をすると、筈が中断したからだ。

六年間竹刀を握っていない彼の實力は、想像以上に落ちていた。

もちろん単純に体力が落ちていただけの問題では無い、竹刀の重さも防具の重さも六年前その身体が覚えたものとは全く違う。中途半端に覚えている六年前の身体感覚が、今の身体を振り回す。加えて現在の不安定な精神状態は、一夏の根本的な集中力を奪っていた。「弱すぎる……、六年間竹刀を握っていないと言うのはホントだったのか」

面を脇に抱え、筈は呆然とつぶやいた。

「しょうがないだろ、家を守ることがオレのことだと思ってたんだ」

「ん、今なにかいったか？」

拗ねたように一夏が呟きを返すが、声が小さすぎて彼女には聞き取れない。

「箒、体力がいるのはわかるけど、今はISでなにが出来るかも知らないんだぞ」

「……ああ、わかった」

その代わり続く言葉に、今はなにをしても無駄なのだと、漠然と理解する。

「だが、走り込みくらいは付き合え」

今更一朝一夕で体力がつくはずも無い、だからせめて運動すること慣れておくべきだと、彼女はそう判断した。

一夏の返事を確認し、道具を片付けに更衣室に入る。

溜息が出る。六年前から抱いてきた彼の勇姿が崩れてしまいそうで、箒は少し一人になって落ち着きたかった。

「ねえ、篠ノ乃さん、織斑君とどんな関係？」

「織斑君剣道好きなの？」

「勧誘したら入ってくれるかな！」

「んな、な、な」

が、世の中そう甘くない。彼女が入った更衣室には同学年の部員達が待ち受けていた。

「あんまり強くなかったけどブランク？」

「やっぱりたくさん戦うのが一番だと思っの、次は私にやらせて？」

「あ、ずるいずるい、私も！ 私も！」

こういう事態を避けるために剣道場ではなく体育館を使ったわけだが、防具を借りる場所は他にない。部長だけに話を通したつもりだったがどこかで洩れていたのかもしれない。

単に食堂からつけられていたのかもしれないが。

「い、一夏は玩具ではないのだぞ」

「まああれだ篠ノ乃」

戸惑いうるたえる彼女の肩に、どこからともなく現れた部長の腕

が回される。落ち着けというように。

そしてその後ろには二三年の剣道部員達が一揃いしている。

「別にお前の彼氏を寄越せと言ってるんじゃない。せつかく仲間が男を連れてきたんだ、少しくらい羽目を外させろ」

何がおかしいのかにやける彼女の顔を見て篤は悟った。

こいつ、ばらしやがった。

脇に抱えていた面を降ろし、竹刀の柄を両手で握りなおす。一夏に剣道の練習をさせるのはとりあえず諦めよう、まず彼女の頭に浮かんだのはそれだった。ついで人誅という言葉が浮かぶ、確か一夏が剣道を始めたばかりのころに読んでいた漫画だったか？ そうだな。

全国大会優勝の肩書は伊達ではない。それを証明するのも良いかもしれない。

気が付けば竹刀は高く掲げられて……

「一夏、私はもうあがったし、風呂を使っても構わないぞ」

「ああ、切りが良いとこまで読んだら入る」

「一夏、夕食の時間だし、今から食堂に行こうと思うだが」

「ああ、この穴埋め問題が出来たら行くよ」

「一夏、明日も早いし、そろそろ電気を消すが構わないか」

「ああ、こっちにもスタンドがあるからな」

「一夏、走り込みの時間だ」

「ああ、もう少し読んだら……、って、うお、何するんだよ篤！」
劇的な変化など、必ずしも必要ない。

「あ、ああ、走り込みか？ わかった、わかったから引つ張るな！」

番外編：第一夏のすれ違いウィークデー（後書き）

「織斑先生、お茶です」

「む、すまないな」

「いえいえ、それとこれ」

「む？ 何のファイルだ？」

「ええ、自己紹介の内容です」

「ああ、助かる」

「それとこれは、名前しか言わなかった子のリストです」

「……」

「それでは」

「ああ、山田先生」

「はい？」

「少々仕事を頼みたい」

「为什么呢？」

「まず織斑一夏の部屋が決まったので伝えて欲しい、それとこれは彼の再発行したテキストだ、あとセシリア・オルコット、織斑一夏、キラ・Y・ヒビキの実績をまとめて欲しいのと、生徒と保護者間の緊急連絡物の作成だな」

「え……、今週中ですか」

「今日中だ」

「え」

「今日中だ、教室にしなければ自宅まで行け」

「い、今すぐ行ってきます！」

番外編：キラ・ヤマトの優雅な休日（前書き）

「おはようございます織斑先生、コーヒーいかがですか」

「もらおう」

「眠そうですね」

「試合の内訳の構想が思いの外大変だな」

「弟さんの試合ですしね」

「……」

「あ、ああ！ そう言えば今日、ヒビキ君にIS起動するから監督してくれるように頼まれていたんでした失礼します！」

「……逃げたか」

「ん？ 貸し出し申請が多いな、時間差か？」

「いや、これはどう見てもブッキングミスだろう」

「キャンセル待ち？ いや、大丈夫なのか山田先生は」

番外編：キラ・ヤマトの優雅な休日

1. Daily

キラ・ヤマトの朝は早い。まず4時半に起きて顔を洗う。すぐに着替え、授業の準備をし、次に起きてきたシンをトイレに運び、それが終われば今度は風呂場にほうり込み、服を着替えさせ、多少化粧を施し、髪を梳かす。実はこれが非常にめんどくさい。

シンの髪はかなりのくせっ毛で、梳いても梳いても跳ねる。梳いても梳いても梳いても跳ねる。乾くと跳ねる。濡れていても若干跳ねる。後ろは伸ばして縛ることで何とかしているが、前は無理だ。しょうがないのでかつての同僚の言葉に従い、カチューシャで無理矢理抑えている。最近では静電気で髪を寝かせるカチューシャでも作るうかと、真剣に検討しているほどだ。

ともあれ最後に食事。キラは食堂で自分の分を貰ってきて、シンには休日に作っているサプリメントペースト（オレンジ色）を与える。さらに顎が退化しないように、買い置きのカロリーブロックをかじらせる。

そして最後にストレッチ。ほって置くと筋肉が退化するそうなので、適当に運動させると同時に、普段から少し負荷をかけている（両手足に1キロずつ）。ただそれだけだと関節が固まってしまふので、全身の指の関節一つ一つに至るまでストレッチが欠かせない。

ここまででヘロヘロになったキラは、シャワーを浴びて部屋着から制服に着替える。残った時間はプログラミングやISの整備をして過ごし、皆が朝食を食べている頃に学校に行く。

ちなみに朝がこんなに早いのは、一重にシンがなかなか時差に対応してくれないからだ。毎日少しずつ寝かせる時間を遅くし、起きる時間をずらしている。

なお寝かせるというのはエネルギー切れで寝るまで無理矢理運動

させる、ということだ。ここでもキラはへ口へ口になる。

だがまああくまでこれは平日限定。休日はここまでしない。

まず土曜日。

シンを起こし、トイレと風呂には入れるが、化粧も髪の手入れも
いらないし、朝ご飯を食べさせたらキラ自身は（仕事が残っていな
ければ）寝てしまう。

ストレッチ？ 一日くらいサボっても大丈夫でしょ。重りつけて
歩かせもしないし。

そして昼頃に起き出し、遅めのランチを取り、電話をかけプロ
グラム等バイトの成果の納品の打ち合わせをし、借りてきたビデオ
を見たり適当なプログラムを組んだり漫画を読んだりと暇を潰す。

ちなみに最近アメリカの無茶なクロスオーバー作品がマイブー
ム。

ついで日曜日。

こちらは平日と同じようにシンの準備をするが、起こしてから7
時半までは二度寝タイム。改めて起きてからシンの世話をし、連れ
だって外出。生活用品（主にシンの食料）を買い足しながら、打ち
合わせた場所にて成果を納品。時々友人が直に受取に来るので雑談
を交わしたり、情報交換をしたり、漫画を譲ってもらったり。

それが終われば寮に帰り、シンの食料を作る作業に入る。

これは意外と楽しい。栄養が偏らず、消化の妨げにならないければ
何を入れても良いのだ。しかもシンは味を気にしないので、失敗を
恐れる必要がない。類は友を呼ぶ等というが、最近ではバルトフェ
ルドの趣味が少しだけわかりつつあるキラなのだった。

2 . F r i d a y n i g h t

さてそんな楽しい休日に、今回に限って闖入者があった。いや、正確にはその前日なのだが。

「キラ、俺にISの事を教えてくれ！」

「あ、あのねえ一夏、中国の故事じゃないんだから」

これで一夏にそれを頼まれるのは三度目になる。キラとしてもいい加減飽き飽きしていた。しかも今ちようどシンを寝かしつけるために運動させている最中で、疲れているため機嫌も悪い。

「そもそも僕はそういうことに詳しくなんかないんだ、だから習うなら相応の相手って言うのが」

「俺が聞きたいのは」

それでも穩便に追い払おうと発した言葉を一夏は遮る。

「多分俺がキラに教えて欲しいのはISの事じゃなくて、いや、ISの事でもあるけどその……、キラに納得してほしいっていうか」
「もう僕に何して欲しいのかはいいよ、どうして割り込んできたの？」

もはや諦めて溜息をつく。よく考えれば今まで邪険に追い払って来ての今日だ、今更帰るはずもない。

「護れるようになりたいんだ、千冬姉を」

今までの要領の悪さは何だったのか、きっぱりとした答えが帰ってくる。

「知りたいんだ。どうすればいいのか」

キラは黙って一夏を見返す。ああ、何か失敗を取り返したいんだな。目の光の中からそんな意志が読み取れた気がした。同時に、多分漠然と、キラが護れなかったことを一夏は感じたのだろうとも。胸元の指輪に熱を感じる。護れず、猫のような舌で傷を舐めあい、救えず、すれ違ったまま死んで行った女性。何度も取り返そうと、取り返したいと願って叶わなかった失敗。

「わかった、ISの練習に付き合っよ」

「ほんとか！」

「明日一日だけね」

再び溜息。

「ただし訓練用ISとアリーナの貸出申請は自分でやってね」

「おう」

なにか肩の荷が下りたように、意気揚々と一夏は帰っていく。ちやんと申請できるのか不安ではあるが、キラはキラで教師に監督を頼まなければいけない。

彼は部屋備え付けの端末と向き合った。

3・Day off

土曜日、本来なら寝てる時間。シンを連れたキラは、アリーナのピットでひたすら一夏を待っていた。

「おそいなあ」

幸いなことに、申請自体はちゃんとできて、なおかつ貸し出し許可は下りたらしい。ちなみに監督は山田先生が来た。では何故待たされているのか？ 学園側のミスで訓練用ISが一つダブルブッキングしたらしい。先に申請していた子に取り合えず貸し出されたが、問題は後から申請した方、つまり一夏だ。現在キャンセル待ち&他の対処法考え中、朝一で連れて来られて盛大に時間の無駄だった。かくして2時間後、

「キラ、キラ！」

「うん……、クラゲの盆踊りたいか……」

「起きろって！」

「あれ……、ばなーじ？ ないとがんだむは……？」

「誰だよ！ しかも寝言の前後に脈絡が無いし！」

キラは完全に寝惚けていた。

「え、なに、準備できたの？」

「ああ、学園側のミスだからって、山田先生の貸してもらえらしい」

「ふーん」

座っていた椅子から立ち上がって伸びをした彼は、そのままの姿勢でISを装備した。

薄紅色の装甲、ウイングスラスタはより紅く後ろに流れ、白い胸部装甲にはダークグレーのワンポイント、前頭部のハイパーセンサーには二本の金角。

「先に空で慣らしてるから、起動くらいは自分でできるでしょ」

言う間に飛んでいってしまう。一夏は山田真耶とアスカと三人で取り残された。

「ええと……、そ、それじゃ起動してみましようか」

「あ、はい。触ればいいんですよね」

「そうです」

山田真耶がカートで運んできたそれに、一夏はそつと手を伸ばす。一夏が入試で起動したのは打鉄、今起動しようとしているのはラファール・リヴァイヴだ。

「これ、キラのと似てる」

「あれ？ 織斑君触りました……たね。起動してます」

繋いだPCでISの状態をチェックしていた山田真耶が呟く。

彼女の仕事は本来、一夏にISを貸し与えることではなくアスカがISに手を加えないか見ることだ。そして今のところその兆候は無かった。

「それではISを装着しましょう、そこに背を預けるようにしてください……、では足を入れてそつちに手を、はい！ それで完了です」

「おお、動く」

だから彼女は油断していた。アスカの手がキーボードに触れたことに、ディスプレイにわずかなノイズが走ったことに気づかなかった。

「それじゃ織斑君、頑張ってくださいね」

「はい」

「というのが昨日のあらましですね」

「い、いやいや、肝心の訓練は？」

明けて日曜日、ちよつとオシャレなカフェでキラは紅茶を飲んでいた。

「1時間くらい生身の一夏を抱えて飛んで、それからISに乗った一夏を抱えて飛んで、最後に一夏をひたすら飛ばせたくらいですけど」

「えー……」

相手はアメリカ時代の友人、勤めていた会社の元同僚であり、現在はキラに仕事と給料をくれるアルバイトの上司でもある。

一夏との訓練の後部屋に帰ると、留守電で『行くから』とのメッセージがあり、キラは慌てて待ち合わせ場所を探す羽目になったのだが、そういうばと以前からケーキが美味しいと評判で行きたかったカフェ（ここだ）を指定することにした。

アメリカから来てもらってなんだがお題は向こう持ちなので、既にモンブラントチョコレートを攻略、現在イチゴシヨートに取り掛かっている。評判通り美味しい。

「たった一日で出来ることなんて無いですよ」

「そんなもんかね」

「変に戦い方を覚えると死にますから」

今一納得していない上司の口に唇を突っ込んで黙らせる、ありきたりな『甘さ控えめシヨートケーキ』はキラの趣味では無いのだ。

「それより飛び方を覚えた方が建設的です。一応知ってる格闘技の型とか一通りやらせましたけどね」

動作確認のために。

ISを装備すると膝から下の長さと同前膊、肘から先の長さが変わってくる。両肩の非固定浮遊装備も視界の中にあることに慣れなくてはいけない。

結局キラがやったのは、基礎の基礎だけだった。

「ふむ、いい生クリーム使ってるな。もう一つとるか」

「聞いてました？」

「しかし変わった喫茶店だなキラ、『いらっしやいませ』と言われたぞ」

「……聞いてないし」

「オレはパイロットでは無いからな、お前の感覚はわからん」

隣に控えていたウェイトレスにケーキを頼みながら胸を張る様に、キラはなんとなく目を反らす。目に入ってきたのは、シンの頭に飾られた白いリボン。飾ったのは目の前の上司、口調に似合わず少女趣味だ。いや、アメリカでは相応の口調だったか。思いだし、今と比べ面白みを覚えたところで口を開く。

「まあ僕だってISのパイロット経験は無いですから、確かなことはわかりませんけどね」

「それに教わったLast Hopeの不幸か。男共に後ろから刺されるなよ」

「刺されませんよ」

Last Hope、一夏の事だ。キラがいるため厳密には違うのだが、彼以外男性IS操縦者がいないためそう呼ばれる時がある。この場合は皮肉としてだが。

「まあいい、仕事の話をするのか」

「はあ」

キラは差し出された封筒を受け取りアタッシュケースを差し出す。

「今時給料手渡しって……」

「オレの趣味だ」

「そうですね。……それに入ってるのは五分の一スケールの模型です。機能は同じでマイコンは入ってないけど、向こうで作った奴で動くはず」

「ほう」

「中身は証明器具に見えるようにしてあります。実際出力はその程度だし」

「プログラムは」

「このUSBに」

「パーフェクトだウォルター」

「それはどうも」

褒めるならケーキではなくこっちを見てほしい。と言うのはキラの贅沢だろうか？ いや、実際ケーキを褒めてるのかもしれない。

「しかしなんだな、明日実動データがとれるとは」

「先週のうちに来るって言われてたら、すぐ電話してましたよ」

「うんまあ、そっちはユーリに任せよう」

「え、来週も来るんですか？」

思わず聞き返す。ぽんぽん飛行機に乗りやがって、このセレブめ。実動データだからな、機械的な報告だけで無く生の感想も聞きたい。電話じゃ味気なからう？」

「ユーリはケーキ食べないからな……」

「漫画の話が出来るだろう」

「はあ」

気の無い返事を返す。そうゆうのは部屋でやるものだろう、わざわざ休日昼間にカフェやらに出向いてしたくはない。というのがキラの考えだ。

「日本人とはそういうものだろう、君は相変わらず日本人らしさが足りない」

「僕はそもそも日本人じゃありません」

「ふん」

鼻で笑い、席を立とうとすると。即座にウェイトレスが伝票を持って来た、よく訓練された動きだ。感心したらしくお会計を済み帰ろうとするその娘の尻を撫で、驚いて振り向いたところに5ドル札を握らせる。日本には無いがいわゆるチップだ。

こっちに来ただけのころは自分も（セクハラは挟まないが）よくやったなあ、としみじみ思いながらキラ達は店を出た。

しかし5ドルって……、相当気に入られたな。

「そういえば『いらつしやいませ』の何が変なんですか？」

「日本のカフェでは『おかえりなさい御主人様』と言うのだろ」

「あ、あのですね」

呆れたようにキラは頭に手をやる。

「あなたは女性ですから『お嬢様』か『ミレディ』でしょうリナさん」

「どっちにしろ違つたろう、『あゝれ』も無かつたぞ」

「そういえばそうですね……、でもあれやる店あんまり多くないみたいですよ？」

キラ・ヤマト・ヒビキ。日系人コロニー生まれ月およびオーブ育ち。就職地アメリカ。日本に来てもうすぐ二ヶ月。

番外編：キラ・ヤマトの優雅な休日（後書き）

「織斑先生！　これ！　私のISのデータが！」

「あれ？　お休み中ですか」

「昨日も遅かったみたいですし、しょうがないですね」

「しょうがないですね、十分したら起きてもらいましょう」

「それにしても」

「ISのパーソナルデータがデフラグされてるなんて」

「動かしやすいけど、最適化しないようにノイズも入ってる」

「これ、ほんとにヒビキさんがやったんでしょうか……」
「ん」

「あ、起こしちゃいましたか？」

「ああ、山田君か……、今何時だ？」

「まだ5時ですよ」

「そうか……、そうかそうか」

「お、織斑先生？」

「三時間寝過ごしたのだな私は」

「え……」

「今日の一夏とキラの訓練内容を一時間以内にレポートにまとめろ！
組み合わせの最終検討に使う！」

「は、はいい！」

第六話 勝つさ（前書き）

お待たせしました。

いよいよクラス対抗戦編。

相変わらず時間が詰まっててあれなことになってますけどね。

注・今回はC Eの話題が半分程を占めます。

第六話 勝つさ

ただいま月曜日四限目、織斑一夏はだれていた。ギリギリ二限の内に始まったクラス代表決定戦第二試合はなんだかんで三限まで纏れ込み、セシリアとキラの駆け引きに目を輝かせた彼は、いざ自分の番だと勇んでISを装着したのだが、

『織斑君、オルコットさんが棄権したので織斑君の不戦勝です』

一気に冷めた。

今更通常授業というわけにもいかないので、残り時間は試合に関する考察をまとめる時間に当てられ、一夏は少しふて腐れながら教室に戻るようになった。

なお提出されたレポートをまとめた三人の評価は、

キラ

- ・ 武器の扱いが壊滅的に下手。
- ・ 飛行がとてもうまい。
- ・ 反射神経（。A）

一夏

- ・ 飛行が下手。
- ・ 時々剣の振り方がおかしい。
- ・ 必殺技k t k r

セシリア

- ・ 飛ぶのが上手い。
- ・ 動きが綺麗。
- ・ いんたーせぶたー（笑）

となっている。

一夏は最後の瞬間まで零落白夜を取っておいたのが好評、セシリアは数を質で擦じ伏せたと言う点と、結局負けたという二点でのせめぎあいといったところか。なおキラは童顔王子様ルックなので負けてもさほど評価は下がっていない、人前で泣いて見せたら逆に上がったかもしれない。まこと顔が良いというのは得である。

さて、散々好き勝手言われている三人だが、実際にそれを聞いているのは一夏だけだ。あと二人はシャワーを浴びてるとかでまだ教室にいない。

それが彼の憂鬱に拍車をかけていた。

「そういえば一夏」

「ん？ なんだよ箒」

「クラス代表は七割方お前で決まりだそうだ」

「そっか」

机に突っ伏したまま、一夏は気の無い返事をした。彼にとってそんなことはどうでもいい……、

「って、なんでだよ！」

当事者が自身でなければだが。

「さっきの試合はクラス代表決定戦だぞ」

「ああ……、いやでも」

「オルコットもヒビキも武装に大きなダメージを受けた。特にオルコットのブルー・ティアーズは試合までに復帰できるかわからないそうだ」

箒の言葉に一夏はなんとも嫌そうな顔をする。理解しても納得しがたいのだろうか。まあ一勝一敗二勝無敗二敗といったら、普通は二勝無敗が選ばれるだろう。

「まあなんだ、四組のクラス代表も代表候補生らしいが、お前ならなんとかなるさ、皆期待してるんだ、頑張れ」

「……おう」

チャイムが鳴り、箒が席へと帰っていく。水面下で一夏のテンションが上がった。

「それでは織斑君のクラス代表就任を祝って！」

『かんぱーい！』

夕飯の時間、一年一組は食堂の一角に集まっていた。昼休みに多数決をして、正式に一夏がクラス代表に選ばれたからだ。なおその話を聞き付けた隣のクラスやその隣のクラス等から、あまつた方を^{キラ}クラス代表に迎えたいという打診があつたとか無かつたとか。

ちなみに予鈴直前に帰ってきたセシリアがきっぱり断った。

「どうした一夏、浮かない顔だな」

「ん、うん……」

「織斑一夏、仮にも代表がそれではカッコが付きませんわ。胸を張ってください」

正面に人影。一応主役の一人にもかかわらず、堂々遅刻してきたセシリア・オルコットだ。

「セシ……オルコットさん」

「呼び捨てで構いませんわ。戦つてはいませんが負けたのは私です」

「そ、そうか？　じゃあ俺も名ま」

「クラス代表には」

セシリアは一夏の言葉を遮って、試合中ISをもっていたようにスカートの端をつまみ優雅に一礼する。

「それなりの敬意を払わせて頂きますわ、織斑さん」

嫌味にならないのは本人の容貌故だろうか？　そのまま一夏の隣に腰を下ろす。

パーティーの主演は一夏、セシリア、キラの三人で、当然中央が一夏、その両隣は『戦友』が埋めるはずだった。だったのだが二人とも現れなかったため、幼馴染みである篠ノ乃篁が暫定的にその席を使っている。勿論両隣あるのだから彼女がどこ必要は無いのだが、『戦友』が遅まきながら現れたせいで若干旗色が悪い彼女は、反対

側に腰を下ろしたセシリアを視線で牽制していた。

「キラさんもアスカさんもいらっしやいせんわね……」

対してセシリアは一夏にも箒にもさほど関心を払わず、落ち着かない様子で時々入口の方に目をやる。空振り続ける箒の殺気は、わずかに空気を重くしていた。他の女生徒たちが一步退く。

しかしそんな空気を全く気にしない、いや気付かない者がいた。一夏だ。

「セシリア、ブルー・ティアーズは大丈夫なのか」

「ええまあ、ビットだけなら換えがきいたんですけど、バインダーのダメージが大きくて直すには少し時間がかかりますの」

「そうなのか、少し残念だな。セシリアとも戦ってみたかった」

「飛行訓練程度なら付き合いますから、クラス対抗戦頑張ってくださいね」

「おう」

彼はまるで何も無いようにセシリアと会話していた。

「そつえばセシリアはキラがどうしたか知らないか？ 試合の後見てないんだよな」

「知りませんわ。ビットが違いましたもの。織斑さんこそ知りませんの？」

「シャワーって言うてすぐ行っちゃったからなあ」

「え？」

「え？」

お互いの言葉に疑問符が返る。一夏の言葉にだからどうしたと返すセシリアと、何がわからないのかわからない一夏。ついで箒もよくわからない顔をしている。

「あの、アスカさんをどうしましたの？」

セシリアはシャワールーム周辺で彼女を見ていない。連れ込むはずも無い。ならビットにいたと見るのが妥当だろう。

「え？」

「え？」

第と一夏の声が被る。第は言われて思い出した、忘れていた自分への再確認。一夏は純粹に意味がわからないというように。

「だって俺がピットに戻ったときは、もういなかったぞあいつ」

「え？」

「え？」

最後はセシリアと第の疑問符の唱和。内容も純粹な疑問だ。

A BそれぞれのピットからISが発進するのは別に伊達ではない。機体をモニターする上で観測機材に登録する作業を兼ねている。

今日は試合構成上出入りするピットが一度入れ代わった。最初はキラがBピット、他全員がAピットに集まった。アスカをどちらに置いておくかは話し合いの結果人がいる方、Aピットになった。もしBピットであれば白式の一次移行は無かっただろうし、また違った結果だったろうが。とまれ第一試合、各ピットから出た二人はそれぞれのピットに帰り、キラは再発進、一夏はセシリアと交代して第二試合が始まった。第二試合終了後、セシリアはBピットに入り再発進、キラはAピットに入りアスカと合流、一夏と交代する、というのが一連の流れになる予定だった。

「オ、オルコット」

「わ、わたくし試合に夢中で、織斑さんと入れ違いで直ぐに出ましたし」

「ヒビキが出て行った時には確かにいなかったが……」

「織斑さん、それは確かですか？」

二人とも覚えていなかった。少なくともピットに置いて行ったわけではない、というのが第の答えだ。

「ああ、白式のこととて礼を言い損ねたからな」

「では……、アスカさんは今どこへ？」

俄かに空気が重くなる。

そもそもアスカがAピットにいたのは、キラが試合に出ているあ

いだに彼女ら、特に箒が面倒を見れるからだ。彼女の脳裏に浮かぶのは、一夏が白式を装着するのを当たり前に手伝っていたアスカと疑問を持たず共に作業していた自分。

思わず立ち上がる。

「わ、わたしがヒビキを探して」

「はい、みんな大好き新聞部です！ 今話題の男性IS操縦者さんにインタビューに来ました！」

だが彼女が席を発つ前に、重い空気も群がる女生徒もなんのその、カメラを胸に下げた女生徒が飛び込んできた。学内の情報を生徒視点で面白おかしく広める活動、新聞部所属の二年生だ。リボンと腕章がハッキリそう示している。

「あれー、どっか行くの？ あ、もしかしてその席譲ってもらえる？」

「え、いや、その」

状況の変化に対応できずうろたえる彼女の手を、セシリアが引いて座らせる。

「一人歩き出来ない方と聞いています。いくらなんでももうキラさんと合流されたでしょう」

「し、しかしだな」

「ピットは制御室からもモニターされてますのよ？」

暗に、教師にまかせろと言っている。そもそも四限以降の授業には一切出席していないのだ。とつくに教師が対処していると見るのが妥当だろう。そういえばそうだと一夏も納得したそぶりだ。

「ええと、ヒビキ兄妹のはなし？ さっき寮の前で見たけど」

「ほんとですよ！」

わずかにセシリアの腰が浮いた。

「うんうん、じゃあ安心したところでインタビューいいかな？」

「……そういえばそういう話でしたわね。良いでしょう。イギリス代表候補生セシリア・オルコット、隠すことなどございませんわ」

「ああ、いやいや、ターゲットはこっち」

そのまま立ち上がり腰に手をあて胸を張るセシリアを新聞部少女は華麗にスルー、一夏にカメラを向ける。

「え、俺？」

「世界で唯一と謳われた男性のIS操縦者！ 世界は君のことを知りたがってるのよ！」

そういつてシャッターを切る。

フラッシュがそれほど眩しくないのは、オールドタイプのカメラのようで、そういうデザインのデジカメだからだったりする。

「あーん笑って笑って？」

一夏は戸惑ったような顔でカメラを見る。当然笑えてなどいない。

「いや、結局俺だけじゃなかったし」

「でも織斑君だけなんですよ、起動から出来るのは」

「そんな話まで知ってますの」

驚いたように口を開くセシリア。確かに本人は隠していなかったが、積極的に公開する情報ではないし、気にするような話でも無い。同級生ならいざ知らず、目の前にいるのは二年生だ。

「当然学園側から支援あつての情報だよ、隠すためにならないからね」

「ためにならない、って」

「日本政府の、ですわね」

大人の事情である。

本来それらは秘匿したい情報だ。誰だつて独占できるモノは独占したいだろう、一夏にせよヒビキ兄妹にせよそうだ。だが一度公になった以上下手に隠せば痛くない腹を痛むまで探られかねない。一夏は学園に入れなければなんとかあったかもしれないが、ヒビキ兄妹は勝手に来て学園に入ってしまった。どうしようもない。

最も公開しすぎると逆に、まだ何かあるんじゃないかと疑われるため、さじ加減は非常に微妙なのだが。

「まあ公に情報を開示されてる織斑君より、ほとんどが謎に包まれているヒビキ君の方がニーズはあるんだけど」

頬に指をあて小首を傾げる。

「私はやっぱり織斑君の方が好みかな」

「なな、なにを馬鹿な！」

新聞部少女の言葉に顔を真っ赤にした篤が食いつく。

「インタビューに来たのだろう！ 戯れるのも大概にしろ！」

「そうなんだけどさ、織斑君とオルコットさんで直接やって無いんだよね。どーもパツとしないってゆーか」

「じゃあ帰れ！」

「あ、篠ノ乃さんで去年全国大会で優勝したんだよね」

「だからどうした」

「『並み居る強豪を打ち倒しクラス代表を勝ち取った織斑一夏君と、その剣の師匠篠ノ乃篤さん』次の記事はこれで行こう！ さあ並んで並んで？」

「わ、私は一夏に指導など」

「隠したってダメだよ、新聞部はありとあらゆる場所にコネクションがあるんだから」

ヒートアップする篤をもとめせず、新聞部少女は至極簡単に状況を転がしていく。一夏は全くついていけずに話を聞き流し、セシリアはもはや興味が失せたのか我関せずといった顔だ。

気が付けば一夏と篤は並んで立たされ、

「はい、チーズ！」

「なんで全員入ってるんだ！」

シャッター音の後に篤の絶叫があった。ツーショット写真のはずがクラスメイト達が一斉に入ってきて来たからだ。まあ、他人に転がされるだけで好転するほど世の中甘くは無いということか。

これには新聞部少女も苦笑いをしていたが、構わずマイクを向ける。

「それじゃオルコットさんと織斑君、今回は戦わなかったけど、戦ったらどうなったと思う？」

「勝つさ。次は実力で」

一夏は向けられたマイクに強く言い切る。未だに戦えなかった悔しさが抜けきっていないようだ。それはどうなっていたか、というより次を目指した目標だろう。

だが新聞部少女もなれたもので、適当に相槌をうちながら、ノートにペンを走らせる。

「ふむふむ、どんな相手だろうと俺と白式が負けるはず無い。……っと」

紙面掲載用に少しばかり訂正が入って繰り返された言葉に、セシリアは口元に手をあてクスクスと笑いをこぼした。

「オルコットさんはなんだか余裕だね？」

「いえいえ少し困りますわ、白式の雪片とは相性が良くないですから」

聞き咎めた外野の野次に少しは考えるような顔をして彼女は返した。そんな殊勝な様子にクラスメート達は一樣に彼女に向き直る。

「手加減して勝つのは難しそうですわね」

「お、言うねえ」

「遠距離射撃型のわたしが、近距離格闘武器しかないあれに負けるはず無いですわ」

一夏はむっとしたようだが、何も言わない。クラスメート達はその大口に改めて呆気にとられた顔。怒ったのは筈だった。

「ヒビキに負けたくせによく言う」

「今日は試合の勝敗よりも優先することがありましたの」

「負け惜しみを……！」

睨む彼女とあくまで余裕を見せるセシリア。間に挟まれて居心地悪そうな一夏に新聞部少女のフラッシュが降り注ぐ。

「負け惜しみかどうかは一月後の学年別個人トーナメントでわかることですわ。まあ私と当たるまで勝ち残れば、ですけど」

「なにー！」

「お、落ち着けてる」

「それでは私、補給のために本国と連絡を取る必要がありますので」
クラスメート達は迷わず、席を立つセリシアのために道を開けた。
彼女を負けた人間と言い切るのは少し難しくなっていた。

ちなみにイギリスとの時差が九時間、今は午後七時過ぎなので、
向こうは午前十時頃である。

星の輝きがちりばめられた漆黒の中、輝けない灰色の巨人が迫って来る。

「誰だ！ 誰なんだ！ 君は！」

「わかるだろう？ お前には。俺は……、ラウール・クルーゼだ」
ビーム、ビーム、ビーム。自分を焼き尽くそうと、世界を焼き尽くそうとする閃光の雨。とっさに張ったビームシールドの向こうで、その姿は確かに前大戦で死闘を繰り広げた相手とかぶる。

圧力、機体が軋みをあげ、キラはドラグーンを放出ウィングの出力を上げて離脱する。

「人の夢、人の未来、その素晴らしき結果、キラ・ヤマト！」

「うう」

離脱したドラグーンにビームが殺到するが、これは辛うじて回避。敵に向き直る。

相性が悪い。

ストライクフリーダムは高速機動と手数が売りだが、敵は面制圧と圧力が売りだ。どちらもビームシールド発生装置を持ち、正面からは落とせない。

ドラグーンが小さくても、フリーダムが速くても、面を潰されればいつかは当たってしまう。なによりキラは相手に苦手意識を持っていた。

「ならばお前も、今度こそ消えなくてはならない！」

「ラウール・クルーゼ……」

「俺達と一緒に」

機体をロールしながらの一斉射、ランダムシュート。その一つ一つの銃口を見切つてドラグーンとともに回避、辛うじて被弾は無し。「生まれ変わるこの世界のために！」

守勢に回れば負ける。呼び戻したドラグーンと共にフルバースト！ 交錯する火線、空で解ける光条、ビームシールドにかかる圧力。「く！」

感じるのは相手の苛立ち。怒り。苦しみ。

「そんな、なぜ君が、なぜ君がまた！」

正面から突破できないその事実に業を煮やしたらしいレジェンドのドラグーン――突撃ビーム機動砲が、本体から大きく距離を取り回り込んで来る。

「逃れられないもの、それは自分！」

激昂とともに放たれたビームが再びに襲い掛かる。がキラは予期していたそれを、自らのドラグーンで撃墜する。

「そして取り戻せないもの、それが過去！ だから終わらせる！ 全て」

レジェンドのビームライフルが光りを放ち、敵を狩ったドラグーンが墜とされる。まるでチェスや将棋のようにお互いの駒が駒を護り、無防備になったそれを喰らい喰らわれ、違うのは例えお互いの駒がキングだけになつても戦いが終わらないことか。

「そしてあるべき姿に戻るんだ！ 人も！」

二つの大型ビーム機動砲が、先端にビームスパイクを形成した。「世界も！」

それをそれぞれの手にとつたレジェンドが、残るビーム機動砲からビームを乱打しながら真っ直ぐに襲い掛かつて来る。

「でも違う！」

キラにはその言葉が、誰よりも彼自身を否定する言葉に聞こえる。力だけが僕の全てじゃない。かつてそう叫んだのは、なにより彼

がキラを憎んだからだ。目の前の彼が憎んでいるのはキラではない。彼自身、彼を産んだ世界、その成り立ち、己を縛る運命。かつてキラ自身が己の解放のために叫んだ想いを、目の前にいる彼のための言葉で叫ぶ。

「命は何にだって一つだ！」

肩を、背中ของプラットホームを狙ってドラグーンを、ビームライフルを放つ。ビームシールドに止められるが、確かにその圧力は相手の動きを鈍らせた。

「だからその命は君だ！ 彼じゃない！」

続けて放ったカリドウス複相ビーム砲に、ついにレジェンドの動きが止まり、こちらに機体正面を向ける。

フルバースト。

スーパードラグーン七基、カリドウス複相ビーム砲、両手のビームライフル、両腰に下げたクスフィアス3レール砲による圧倒的な制圧。

だが、

「なにを馬鹿な！」

それが撃ち抜いたのはたった一つのビーム機動砲に過ぎなかった。「だから貴様を倒すといっている！」

再び向けられるビーム突撃砲によるビームの乱打。フルバーストから即座に高速機動に移れるはずもなく、とっさにビームシールドで受け。ドラグーンで迎撃、一つ二つ爆発が起こるがしかし一向に圧力が消えない。

衝撃。二本のビームジャベリンが、ビーム同士の干渉とは違う重みのある衝撃を伝える。さらに衝撃、その手のビームライフルが柄を握り潰すか否かという勢いで連射されている。銃口が赤熱化している。いや、ビームライフルだけではない。ビーム機動砲一つ一つの銃口が赤熱化し、悲鳴を上げている。

「お前を倒す！ そしてこの世界を！」

右手一本でビームライフルを放ち、左手にはビームスパイクを形

成した大型突撃ビーム砲。

零距离、左手のバックブロー。ビームシールド同士が干渉した隙間にビームスパイクが食らい付く。半身を引き回避するストライクフリーダム。

「まだだ！」

「馬鹿かお前は！」

瞬間スパイクを形成していた砲口からビームが出る。ストライクフリーダムの半身が焼かれていく。

「う、うわあああ！」

「消える！ スーパーコーディネイター！」

焼き付く左腕、三つのドラグーン、カリドウス複相ビーム砲口、だが、

「アラート？ エネルギー切れだと！ 予備を解放しろ！」

砲口が赤熱化するほどのビームが、赤熱化したビーム機動砲の砲口を守るために電圧を上げたVPS装甲が、過干渉を起こしたビームシールドが、レジエンドのエネルギーを食い尽くそうとしていた。「PS装甲の、電圧をおお！」

「ば、馬鹿な！」

大型ビーム機動砲が止まる。赤熱化した砲口が、電圧を上げて光り輝くフリーダムの装甲に押し潰された。

「あああああ！」

振り抜かれたシュペールラケルタビームサーベル。レジエンドの両手が落ちる。

蹴られ、突き放されたレジエンド。

「こんな、こんなところで……！」

「はあ、はあ、はあ……、もう終わりだよ」

半数に減ったスーパードラグーン、両腰のクスフィアス3レール砲、右手のビームライフル。だがそれで充分だ。

コクピットは狙わない。だが武装を全て破壊する。彼との戦いはそれで……、

（いいのかな？ コクピットを狙わなくて）

「だ、誰だ！」

どこからともなく声がする。気が付けばなににもかもが静止していた。慌ててあたりを見回すと、一つの白い人影がある。あれが声の主だろうか？ そちらに飛ばうと操縦桿を握り、気付いた。なにかを指差している。なんとなくそちらにメインカメラを向けて、それを見た。

悪鬼羅刹の如きデステイニーの姿。半ばに折れた実体剣を横たわるアカツキのコクピットに何度も何度も振り下ろす。

「き、キラ……、助け……」

「ムウさん！」

震えながら伸ばされたアカツキの右手が、力無く崩れた。

飛ばうとして、何故か機体が動かない。

焦燥にかられ、なにかできないか誰か助けてくれないかとメインカメラを動かす、さっきの人影が少し近付いていた。別の方向を指差している。

『裏切り者のアスラン・ザラ！』

足一本だけになったインフィニットジャスティスに、これまた殆ど武装を持たないモビルスーツが群がっていた。メインカメラが無いもの、両手が無くバルカンを撃つもの、他の機体の手足を振るもの、

『どけ、オレは行かなきゃいけないんだ、どけ、どいてくれ、キラ、キラあ！』

たった一本の足にグリフォンビームブレードを起動して、ファトゥム無しでは高速機動で逃げることもできず。

善戦はしている、だが群がるモビルスーツは数に限り知らない。

「アスラン！ アスラン！ くそ、なんで、なんで！」

また白い人影が近づく。ザフトの白服、男。

彼が指し示す先には砂漠が広がっていた。

『もう止めてください！ 勝負はつきました！ 降伏を』

『言ったはずだぞ！ 戦争には明確な終わりのルールなどない！』
見る間にストライクのアーマー・シュナイダーがラゴウのコクピットに突き刺さる。

「あなたには僕を撃つ理由がある」

『戦争の中だ、誰にだってそんなもんあるし、誰にだってない』

次の瞬間にはエターナルのブリッジで彼等は再会していた。キラは知っている。彼が今後その手足を失った不自由さに苦しむことを、夜ごとに古傷が痛み苦しみ生きて行くことを。

（素晴らしい男だな、恋人を殺され、手足を奪われなおこれとは）

気が付けば白い男は目の前まで来ている。もうキラにはそれが誰だかわかっていた。

「ラウ・ル・クルーゼ」

（わからんな、今更なにをためらう？ 君が守れず死なせた人間と、君が殺した人間、一体どれほどの違いがあるというんだ）

「それでも僕は……、力だけが僕の全てじゃないから」

（その不殺がそもそも君の力の証ではないかね？）

「そうじゃない、力だけじゃないから、人を死なせたくないから戦ってるって」

（私は必死だから殺した、私自身を守るために殺した。力があるものは殺しなどしないよ、見せ付けるために生かす。手加減をするのさ）

ふっと世界が色づく。右手に重み、アサルトライフル。銃口の先には一夏の頭。

（だいたい君も知ってるだろう、ISに乗っている限り命は保証されている）

右手をずらそうとするがびくともしない。その手に、引き金に、彼は自らの手をそえる。微かに加えられた力が、さあ引き金を引くと囁いている。

（勝ちたいと言ったね。勝てば良いじゃないか。絶対防御の偉大さ

は君も味わったろう)

「なにか間違いがあるかもしれない」

(間違いとはなんだね？ 君だけが生き残っていることかい)

「僕は、殺したくなんかないのにい！」

「お前が、お前がニコルを殺した！」

「トール！ 駄目だ！ 来るな！」

「やっぱオレって不可能を可能に……」

(いや、最後の一人は助かったのか、偉大だな、X105のセーフ
ティーシャッターは。まあ結局死んだんだがな)

「うう」

(ああつまり君はそれを恐れているわけだ。君は特別だから生き残
ったんじゃないかと)

「はい、マユです。でもごめんなさい。今マユはお話できません

……」

(嘗めるな。戦場に出ようと出まいと、君が撃とうと撃つまいと人
は死ぬ。それは君ももう知ってるはずだ。敗北することが贖罪だと
は、さすがの君も思っていないだろう？)

目の前の仮面が囁く。添えられた手は離れたのに、強張った右手
は引き金から離れない。

(だから、さあ。引き金を)

「いつまで寝てるんですかアンタって人は」

殴られた。

気が付けば仮面も一夏もついでに装備していたISも消えている。

「別にアンタが凹もうが引き金を引こうがオレはいいですけどね」

どうせあの人ガベッタベタに甘やかすだけです。そのため息を
つく。あの人って誰のことだろう？ そんな疑問がよぎる。

「いい加減起きてください。膝が固まっちゃいます。ああそれと」
好き放題言つて、まるで犬でも追い払うように手を払う。

「レイは、生きられる命なら生きたいだろうって言ったんだ。ムカ

つくし、嫌いだけど、好きにすれば良いんじゃないですか」
ホワイトアウト。

「おはよう一夏」

「お、おはようキラ……、珍しいな、キラの方から声をかけて来るなんて」

火曜日朝、一夏が教室に入るとキラがやって来た。

「そういえばどうしたんだ昨日は」

「ん、シンが熱をだしてね」

半分嘘である。熱をだしたのは昨日かもしれないが、キラがそれに気付いたのは、今朝アスカの膝枕から目覚めてからだ。

目を覚ましたのは昨日と同じ朝四時半。自室。ベットの上。布団の中。けれど、何故か頭はシンの膝の上で。

あわてて起き出し何時も通り世話をしようとして、ようやくその変調に気付く。顔が赤い、唇が腫れぼったい、目がトロンとしている。体温が高い。

インターネットで調べたところ発熱の症状らしい。

それを知ったときキラは慌てた。

彼には病気になった経験が無いからだ、精々大気圏突入直後に脱水症状を伴った失調を体感したくらいだ。通説ではコーディネイターは病気にならないとまで言われている。

「だから今日は一人なのか」

「うん、それで、治るまでは看病するから」

そう告げると一夏は残念そうにため息をつく。

「そうか、4組の奴が代表候補生らしいし、色々教えてもらいたかったんだけどな」

「へえ……、4組だけ？」

「確かそうだったと」

「その情報、古いよ！」

突如降って湧いた声。挑発するような響き。

「2組も専用機持ちが代表になったの覚悟してね！」

「鈴、お前鈴か！」

新たな闖入者、あらわる。

第六話 勝つさ（後書き）

・・・自分で言うのも何ですが、最後尻切れトンボな感じですね。

まあもともと今回、鈴は顔見せだけの予定だったので他が長くなり過ぎたのかな。

ともあれ。

この話のテーマとかもそろそろ動き出します。今まで以上に無茶な展開もあるでしょう。

それでも、もしよければ、最後までお付き合いください。

それではまた次回。

第七話 全力で（前書き）

さてやってまいりましたセカンド幼馴染み鳳鈴音。
おまたせしました第七話。

今回書くに当たって、雪片と零落白夜に関する認識を改め、二行ほど第四話を修正しました。

読者様にご迷惑おかけします・・・

第七話 全力で

「さて、今日のISの授業は引き続き実習だ」

グラウンドにて、織斑千冬は教鞭をとっていた。ISの実習授業のためだ。だが、生徒たちは制服のまま集まっているし、訓練用のISも無い。

「実習課題は飛行機動」

生徒たちの間にざわめきが走る。無理も無い、彼女らは入試以来一度もISに触れてもないのだから。

「といってももちろん実際に飛ぶわけではない。諸君らの頭には昨日見たISの機動が頭に残っていると思う。それを正しいイメージと合致してもらおう。オルコット、織斑、ヒビキ」

「はい」

「はい！」

「はあ」

教師の召集に応えた三人は前に進み出る。三人とも他の生徒と同じISスーツだ。セシリアは落ち着いて、一夏は若干緊張気味に、

……キラは魂が抜けたような声だ。

「返事は『はい』だ、馬鹿モノ」

「はい」

いまいち力が無い。

「まあいい、ISを装着しろ」

IS専用機はISスーツを内蔵している。それでも通常なら形式のために着替えさせるのだが、今日は他の生徒が制服にも関わらず着替えさせるのも何なので、そのままで良しとされた。

一歩離れ、セシリアは青いイヤークアスを弾く。

「ブルー・ティアーズ！」

一瞬の発光。次の瞬間には彼女の纏うものは制服の白から装甲の青となっている。

その反対側キラは彼女と同じ用に一步踏み出し、その動作の中で装着した。踏み出した一步先で足を揃える頃には彼は既に紅に包まれていた。

「機嫌は……、治ったみたいだねミーティア」

さて、中央に残った一夏は一人困窮していた。どうやってISを装備したら良いのかわからないからだ。白い腕輪状になった待機状態の白式には起動スイッチなど無く、触っても振り回しても装着はできない。

「どうした、早くしろ」

「ううう、白式！」

とつさに名前を呼ぶ。発光。解けた光の後には純白の装甲を纏った一夏がいた。

「お、おお」

装着直後、バランスを崩し倒れそうになるのを堪える。自分でもまだまだ練習が必要だなと思いたため息をついた一夏だったが、織斑千冬はそれを余裕を取り戻せたと見たらしい。

「よし、では飛べ！」

まずセシリアが、ついでキラが、最後に一夏が飛び立つ。一夏は若干もたついたが、三人共無事に空へ消えていく。

Gを感じない飛行というのは、キラにとって新鮮だった。楽ではあるしすぐに慣れたのだが、なんとなく下腹部がくるくるした感覚に教われる。それに、イメージより早く疲れが来るのだ。

どうしてだろうか？ 首を捻っているうちに、彼は先に行ったセシリアに追いつき、同時に後から来た一夏に追い抜かれた。……恐ろしいことに彼は手を顔の前にかざし、ご丁寧に瞼まで閉じている。つまり前を見ていない。

「うわあああああああああああ——……」

セシリアのギリギリ横をすり抜け、悲鳴を空にとけさせながら一夏はどこまでも上昇していく。しばらく見上げていたキラだったが、飽きて視線を戻そうとして、同じく飽きたのか下を向いたセシリア

と目があった。

互いに無言、だが通じるものがあつた。

「私、空に落ちる。と言うのはこの国の詩的な表現だと思ってましたわ」

「僕は既に体験したからね、言うほどロマンチックじゃないのは知ってるよ」

「経験済み、ですか？」

「一夏とは逆方向にだけどね」

「……それは、空から落ちる。では？」

「いや、空に落ちる。であつてるよ。あの時は熱くて死ぬかと思つたっけ」

「ご冗談でしょう？」

「いや、たしか三……、ああ一夏が帰ってきた」

言われてセシリアが見上げると、そこにはどうにか姿勢制御に成功したらしい一夏が、冷や汗をかき額に青筋を浮かべながら下りて来るところだった。一夏ではなく金髪碧眼の美少年とかなら後光でも射したことだろう。

「よく止まれたね」

「……止まらなかったら死ぬだろ」

「試合の時はもつとまともに飛べてませんでした？」

「あれは短い距離の繰り返しだったから」

セシリアのもつともな問いに、彼は肩を落として答える。

「てか見てないで止めてくれよ」

「あの速度では弾かれてしまいますわ」

「そもそも追いつけないし」

「はくじょーもの」

『そこ！　いつまでしゃべっている！』

ため息をつく一夏に笑う二人。と、地上から通信が来た。

『今から指定した飛行機動をとってもらう、いいか！　いくぞ！』

——真っ直ぐ。——カーブ。——ヨー。——ターン。——90。——

——ストレート。——急上昇。——ターン。——ターン。——急旋回。
——バレルロール。——ターン。

指示に従い飛ぶブルー・ティアーズに、残りの二機が追隨するような形になっていた。といっても飛び方はバラバラで、教科書のよ
うな弧を描いて姿勢をほとんど変えずに飛ぶセシリア、一々身体を
振り回し重心を変えながら遥かに小さい弧で済ますキラ、一々身体
が振り回されともすれば明後日の方向に流れるのを堪える一夏と、
見れば成る程勉強にはなる。

「いいか、目標はあくまでオルコットだ」

教師の言葉に生徒たちからわずかながら疑問の声が上がる。1番
上手いのはキラではないのかと。

「ヒビキのあれは緊急時のモノだ。平時から行つては無駄な体力の
消耗を招く、同時にあの動作は極めて洗練されたものだ、見て真似
できるものではない」

指示が途絶えたため、上空では三人が再び集まっている。

「出来るに越したことはないが、恐らく姿勢を崩してまともに飛べ
なくなるだろう」最後、急降下からの完全停止！ 目標は地表10
センチ」

「それではお先に」

指示が出るなり、セシリアは飛び込みでもするように一瞬飛び上
がり、頭を下に真つ直ぐ落ちていく。いや、スラスターを使ってい
る以上飛んでいる、のだが。

地表5メートル程で反転、足を下にしスラスターによるブレーキ
を数度繰り返し、完全に停止する。

「さすがだね、オルコットさん」

「あ、ああ」

「一夏、行ける？」

「……先に行つてくれ」

「それじゃ下で」

キラはセシリアのように飛び上がることは無く、寧ろ自由落下で

もするようにそのまま下を向き飛び込んでいく。こちらは地表3メートル程でロール、地面に背を向け滑るようにしながらブレーキをかけた。

「よし、行くぞ」

一夏はセシリアのように飛び込む。急降下との命令に従うためにスラスターを吹かし、吹かし、

「うう」

視界がぶれる。

「うわああああああ」

思わず手をかざし、目を固く閉じる。減速も反転も頭から消え失せ……、

「あ、あれ？」

手が地面に触れた。それもゆつくりと。

目を開くとまるで足を掴まれたように逆さまのまま地面すれすれにいた。スラスターがギリギリで止めてくれたらしい。

激突しなくてすんだという事実にあ堵のため息をつくとき、スラスターは動きを止め、掴んでいた手に突き放されるように彼は大地に伏せることになった。

生徒たちから少しばかり笑いが漏れる。

「情けないぞ一夏、大方今朝の転校生のことでも考えていたのだろう」

「んなわけあるか」

真っ先に憎まれ口を叩きに來た篤に、一夏は鼻声で反論する。命を保証してくれる絶対防御も、転んで打った鼻まではガードしてくれない。彼は鼻を抑えたまま立ち上がった、幸い鼻血は出ていない。「見ての通りだ、飛ぶことに恐怖を覚えるところなる」

それを見届けた織斑千冬は、まるで何事も無いかのように授業を続ける。

「他の何がどんなにうまくても飛べなければ勝てん。それをよく理解しておくように。以上、残り時間は自習とする。先達からよく話

を聞いておけ。それと織斑、お前はこつちだ」

起き上がった一夏は慌ててピットに向かう教師についていく。残された生徒たちは、ほとんどがキラに群がって、飛行機動の感想や、最後背中を地面に向けた理由などを聞来はじめた。

わずかに生真面目な生徒はセシリアに話を聞きにいき、何事か頷きあっている。

本当は、山田真耶教師も先達の一人ではあるのだが、なぜか誰ひとり彼女の元には行かず、こっそり涙を飲んでいた。

「それで、なんで俺だけピットなんだよ千冬姉」

「織斑先生と呼べ。……お前のISの動きは不自然だ」

ピットにて、織斑千冬は一夏の白式に観測機器やパソコンなどを繋いでいた。

「まず昨日の試合、お前は何度もバリア無効化機能を発動しかけている」

これは山田真耶のレポートに書かれていたことだ。一夏はキラの近くで雪片を振りかざす度にバリア無効化攻撃を発動しかけている。なお細かく言えば、キラが離れると同時に光りは消え、それでも一夏は雪片を振り下ろした、とある。

恐らくフェイントだったのだろう。そう書いてはあったが、織斑千冬は姉として、弟がそこまで小器用でないことは知っていた。

「つまり、あれはお前の意志ではない。急降下からの完全停止もそうだ、ISは操縦者の意志無くは動かない」

「そうなのか……、そうだよな」

「その理由を確認する」

「理由があったって、ただのサポートプログラムだぞ？」

言い切る彼女に、一夏は不思議そうに返した。しかし彼自身少々疑問には感じているのだろう。その語尾はわずかに上擦っている。

「なに？」

「『しきゅ』とか『しるふ』とかって名前のプログラムが、確か拡

張領域だとかに」

「正確な名前は？」

「『雪片式型制御プログラムsikuy』『飛行事故防止プログラムsylyf』かな、試用期間は一週間て書いてある」

「PCの方でも確認できたが……」

それらのプログラムは、確かに存在した。因みに拡張子は『.slyw』だ。そんな拡張子今まで見たことはないし、いくら検索しても開くのに使えるアプリケーションも無い。

「これはなにをしてくれるプログラムなんだ？」

「雪片式型や零落白夜がどんなものか教えてくれたし、効果があるときだけ発動させてくれたり、地面に激突しそうなとき止めてくれたりかな」

「便利だな？」

「けど融通がきかねえ、振りかざして飛ぶときは発動してた方が飛びやすい」

エネルギーブレードならシールドバリアから外に出ている慣性の影響は受けない。振りかざしたまま飛ぶとき何度も発動させたいと思ったが、結局発動せずに苦労させられた……。というのが一夏の言い分だ。飛行に関してもあくまで地面に激突するまでは止めてくれなかったし、ぶれるのを抑えてくれもなかった。一夏は言及しなかったが、本体には届かないがバリアに攻撃出来るタイミングでも発動しない。バリアの内側で本体に当たるときも発動しない。極めて不便である。

「本当に初心者用なのだな」

「まあ練習するときはあったほうが便利だけど」

「こんなもの、白式には入って無かったはずだが」

「……最初からあったぞ」

「だとすれば……、ヒビキか。そういえば今日は熱だとかで欠席だったな」

少しばかり考えるそぶりを見せる織斑千冬。考えながら一夏に近

付いていく。

「織斑、ここなら届くか」

「え、ああエネルギーブレードなら」

続いて一步下がる。

「届かないな？」

「ああ」

三步近づき彼女は確信をもって言葉を吐く。

「展開しなくても届くな」

「そういえば昔使ってたんだよな」

「無駄口はいらん、足には届くか？」

「いや、腰から下には……」

二歩下がり胸の前で腕を組んだ。脇から出席簿が覗いているのが
なんだかおかしい。

「ここなら？」

「腕になら届くけど」

やはりな、と。得心がいったように彼女は頷く。

「一夏、お前は今まで何度エネルギーブレードを展開した？」

「え？」

そして白式を観測するのに使った機器の片付けを始めた。PCを
閉じ、接続された端子を外し、パラメーターを示していたモニター
のスイッチを切りながら、織斑千冬は淡々と語る。

「私は雪片の間合いを覚えるまで日に千回は素振りをしたし、同じ
だけ剣の型を試した」

「え、あれ？」

一夏がエネルギーブレードを展開したのはキラと戦った一回だけ
だ。ついで言えば、展開する前から彼は間合いを把握できていた。
勿論異常なことだ。一夏はようやくその異常に気付いた。

「ふん、まあいい。試用期間は一週間と言ったな。対抗戦までは持
たないわけだ」

カッカツとヒールをならし、振り返りもせず彼女は一夏の横を抜

けていく。

「織斑、少しばかり稽古をつけてやろう。週末は空けておけ」

「え、い、いいのかよ、教師が」

焦ったような彼の言葉によつやく振り向き、彼女は口端を吊り上げた。

「覚えておけ一夏」

「『半年間デザート半額パスは担任にも配られるのだ』そうだ」

「ほんとに千冬さんがそうだったのか？」

「……おう。まあな」

三度目になる筈の言葉に、一夏は疲れたように答えた。彼自身、姉の言葉に違和感を感じてはいたが、こつも聞き返されると疲れもするだろう。その足にもいまいち力が無い。

「副担任には配られるのかな」

「配られるでしょう、担任にあるのなら」

「そもそも先生が食堂使つての見たこと無いけど」

「私はそういうあなたが食堂を使つているところを見たことがありますわ」

その後ろで喋りながら歩いているのはキラとセシリア。彼等四人は今食堂に向かつていた。そう、今日はキラも同道しているのだ。正確に言えば彼は寮に帰るついでに購買部に寄りたいただけなのだが。

「そつえばキラ」

「なに？」

「syurfとかsikuyつてわかるか？」

「うーん？ 聞いたこと無いけど」

キラの答えに適当に相槌をうちながら、一夏はため息をついた。

「なに、さつき呼び出されたことに関係あるの？」

「キラつてシンに信頼されてるんだな」

「え、なにいきなり」

「うーん」

「……篠ノ乃さん、織斑さんは一体どうしたんですの？」

「……いや、私にもさっぱりわからん。千冬さ……、織斑先生になにか吹き込まれたようだが」

会話から外れたセシリアと箒はヒソヒソと語り合っていた。はたから見ると一夏の言動は支離滅裂で一貫性が無い。正直不気味なのだ。足取りに力が無いのも気になるところ。

「正直織斑先生に稽古をつけてもらえるなら、一夏はもっと浮かれるものだと思うてたよ」

「いや、それは嬉しいんだけどな」

だがそれも無理の無いことだろう。お前の妹が俺を助けてくれたから、俺の姉がお前の妹を敵視してる。等と、どの口で言えというのか。

ため息。

しかもなにを嘆くでもなく遠くを見て若干黄昏れるような風情。

遠巻きに見ていた女生徒たちの嬌声は増したが、近くににいる三人には戦慄がはしる。もはや変とかどうとかではなく危機感を覚えはじめた。

「篠ノ乃さん、こういう一夏ってどうなの」

「いくらなんでも異常ですわ」

「うう、私だって六年ぶりなんだぞ!」

「せっかくだから僕も食堂によるよ、ゆっくり聞きだそう」

「何故こうなる」

「なぜと言われましても……」

「僕もう帰ろうかな」

食堂にて、昼食を目の前に放置したまま手をつけないでいる三人の視線の先には織斑一夏ともう一人、今朝教室に来ていた二組のクラス代表、凰鈴音がいた。

「入試の時IS動かしちゃったんだって？　なんでそんなことになっちゃったのよ」

「なんでって言われてもなあ」

彼等はさっきまでの謎の陰気さが嘘のように和気あいあいと会話している。キラとしてはまだ若干気持ち悪いもののもはや諦め半分で、いつそ忘れてしまおうかとも思いはじめていた。セシリアも同じ気持ちなのだが、箒がメラメラと燃えているせいで今この席から離れがたい。

「で、そのあといろいろあって、この学園に入れられたってわけさ」
「ふーん、変な話ね」

「一夏」

気が付けば箒が二人の席の正面に陣取っていた。

「いい加減説明してもらいたい！　転校生と何故そんなにも親しいのか！」

「オルコットさん、僕もう行くね」

テーブルの端におかれたタバスコを己の皿のうえでひっくり返すと、キラはずっと放置していたパスタをがつつきはじめた。

「キラさんは激辛好き……、と。こ、ここに私一人置いて逃げようと言いますの！」

「だってなんかもう話聞くの無理そうだし、鳳さんが何者なのかもわかったし。なによりシンが心配だし」

「鳳さんの正体？」

「朝あつたときセカンドがなんとか言ってたからね。少し気になってんだ」

朝、彼女は挨拶もそこに織斑千冬によって自分の教室に追い返されたのだが、その直前にキラは一夏に友人として紹介され、彼女をセカンド幼馴染みとして紹介されかけたのだ。

「でも小学校高学年からなら幼馴染みというより、腐れ縁とかしんゆ」

親友、と言いかけたキラの意識に、高速で迫るドンブリが見えた。思わず箸を握った右手で弾こうと振りぬき、

バシャ

「うわぁ！ あつ！」

「だ、大丈夫ですよ！」

中にはスープが残っていた。ひっくり返ったそれが彼の右手に降り注ぐ。まあ、時間があつたためか熱いといっても火傷するような温度では無いのだが。不快ではあるし湯気が立つ程度の温度ではある。

「ふ、ふふ、言ってくれるじゃない」

床に飛び散ったスープの湯気の向こう、彼女はドンブリを投げたままの姿勢で渴いた笑いを浮かべていた。

「一夏にならともかく見ず知らずのあんたにそんなこと言われたくないのよばかあつ！」

少々長い台詞を一息で言い切り、いつぞやのセシリアのようなポーズでキラに指を突き付ける。違うのと言えば若干涙目なことか。どうやら元祖幼馴染み（一夏風に言えばファースト幼馴染み）の登場に、アイデンティティ崩壊の危機を感じた心はかなり脆くなっていたようだ。

「それなら口で言えば言いでしょう、品位が疑われますわ」

「そ、そうだぞ鈴。いくらなんでもやりす……」

「ふふん、……腐れ縁か」

怒るもの一名、叱るもの一名、そして挑発するもの……、一名。

「ごめんね、あなたの名前忘れちゃった。もう一度教えてくれる？ 六年いなかったファースト幼馴染みサン」

「ふふん、態度だけでなく頭も悪いか。セカンド幼馴染み改めて腐れ縁の鳳」

腰に手を当て胸を張り、真っ向から睨みつける鈴。腕を組み胸を張る、そして若干見下ろすような箒。奇しくも昨日セシリアと箒がやり合った席だったりもするのだが、因果関係は無い。例え明日か

らこの席を使う人間が激減しても、それは誰のせいでも無い。

「僕は帰るよオルコットさん、さっきそう言っただけで帰らなかったのが間違いだっただ。まず決める、そしてやり通すそうしないと世界はまた悲劇に」

「ちよつとお待ちなさい！ やるだけやって逃げる気ですの！」

「オルコットさんも逃げればいいじゃないか、もうお互いのほかは眼中にないよこれ」

そつと様子を伺えば、確かに被害を受けているのは間に挟まれた一夏だけだ。飛び火する前に逃げるのは懸命な判断かも知れない。と、

「一夏は私との約束、覚えてるよね！」

気になるワードが耳に飛び込んできた。セシリアの目がわずかに光る。

「わ、私はもう少し様子見させて頂きますわ」

「そう？ それじゃまた明日」

キラはもう全部ほつて置いて帰ることにした。ここであえて残ると言う人の面倒までは見きれない。いや、そもそも彼は他人の面倒など見たこと無いのだが。

「ああ、あれだろ？ 鈴の料理が上達したら……」

かくしてキラはシンの世話に掛かり切りになり、一夏は自主練及び姉の特訓で力を付け、セシリアは料理の練習に余念が無く、箒は人間であるか女であるかに悩み抜き、巡り巡れば一週間と少し。

「今謝れば、少しくらい手加減してあげてもいいわよ」

「雀の涙程度だろ、そんなのいらなから全力で来い」

クラス対抗戦が幕を開ける。

「あれ、あの子ー夏の事が好きだったんじゃ」

第七話 全力で（後書き）

・・・今回も少々尻切れトンボでしたね。

空白の一週間ちよつとになにかあったかは、多分番外編にもしないと思います。

話題にはのぼるかもですが。

それではまた次回。

幕間にちょっと聞いとくれ（前書き）

幕間です、次がバトル展開になるので一息おかせてください。

幕間にちょっと聞いとくれ

僕たちは……、宇宙の片隅に極秘で作られた人工衛星で生まれた。なぜかって？ 秘密にしたかったとか、環境が良かったとか、色々言われたけど、一番の理由は僕らが宇宙で生きるために作られたからさ。子供じみたイメージやロマンだと言ってもいい。

宇宙開発用機動装甲服、通称モビルスーツ。

僕らはそれを纏うために、それを操り宇宙を駆けるために調整されて生まれた。デザインベイベーとかフラスコベイベーとか、まあ好きに呼んでくれてかまわない。

ああ、家族の愛を知らない可哀想な子供なんて思わないで欲しいな。家族ならいたさ。兄弟と……、お父さんがね。

お父さんは2人いた。ウズミさんとデュランダルさん。それから兄弟達が6人。上の世代にはムウさんとラウさん、同じ世代にはアスランとステラちゃん、レイ君。そして一個下にマユちゃん。

ウズミさんの子供だったのがムウさんにシン、僕、それとマユちゃん。デュランダルさんの子供がラウさんにアスランとステラちゃん、レイ君だった。シンはマユちゃんが大好きだったっけ、レイ君もラウさんにべったりだった。でもそれは特別なケースだよ？ 兄弟だからみんな仲良しってわけじゃないし、よその子だから嫌いってことも無い。僕はアスランと仲が良かったし、ステラちゃんはムウさんになついてた。

平和だったよ。僕が14までは、何の問題もなかったんだ。

うん、僕が14になったとき、ウズミさんとデュランダルさんが争いを始めた。後に退くか、先に行くか。終わらない話し合いが続いた。僕は退屈だった。お父さん達は会議ばかりで、僕らは全くかまってももらえなかった。だから一人で自分のすべき事をしようとして……、失敗した。そのせいで起きた事故で僕とアスラン、シンとマユちゃんは命の危機に陥ிட்டんだ。ウズミさんは僕とアスラン

のためにシンとマユちゃんを見捨てた。シンは生き残ったんだけどね、マユちゃんは死んじゃったよ。

僕のせいでマユちゃんは死んだんだ。最後まで謝る事は無かったけどね。

なぜかって？ 知らなかったからだよ。争いは争いになり、シンはデュランダルさん、アスランはウズミさんについた……、ああそうさ。ついに僕たちはモビルスーツを使って殺し合いを始めたんだ。相手の事なんて知る暇はない。

折れかけていたシンを支えていたのはステラちゃんだった。ムウさんは争いが始まったとたん彼女を見捨てたんだ、そんな彼女を護らなきゃいけない、その思いがシンを支えていたらしい。僕やアスランはウズミさんやムウさんがそんな事をしたなんて知らずに彼らについて行った。当たり前だよ。命を助けてもらっただもん。それを悪いなんて言わせない。

僕らはラウさんを殺し、ムウさんにすぐるステラちゃんも殺した。レイ君やシンにはどれだけ許せなかった事だろう？ 気がつけば僕たちは引き返せないところにいたんだ、でも僕もアスランもこう思ってた。

『デュランダルさえいなくなれば元通りになる』

昔はよくしてもらってたのにね。おぞましい話だよ。シンやレイ君、そしてデュランダルさんもそんな甘くない事は知ってたんだろう。シンはムウさんを殺して、アスランのモビルスーツを壊した。レイ君はデュランダルさんの意向で僕らの人工衛星を完全に破壊した、きつと誰も生き残ってはいないだろう。そして僕はレイ君と戦い、勝った。

そして……、そして僕はシンとの最後の戦いに挑んだ。僕らは戦った。お互いのモビルスーツが使い物にならなくなるまで。そして衛星軌道から外れゆっくりゆっくり飛んで行ったのさ。地球に落ちるその日までね。

地球に落ちたときは驚いたなあ。あんな思いをして僕らはモビル

スーツを完成させようとしていたのに、地球にはもうISがあつた。それどころか宇宙開発の事なんて誰もが忘れてISを兵器にする事に躍起になつてゐる。とうとうシンは壊れてしまつてね。それでも人工衛星——新しい時代の担い手として僕らはそれをコズミック・イラと呼んでいたけど——を忘れられなかった僕は地球に落ちたモビルスーツを隠し、シンを連れてこの世界で生きて行く事にしたんだ。これがあらまじだよ。僕らの生きてきたね。

* * *

これはこの話を書き始めた頃考えた、キラがこの世界にとけ込むためのいいわけです。

内容としてはシンの持つていたマユちゃんの携帯電話に録音されているシンの日記を聞いたばかりの頃にキラが考えた、という設定なので若干キラに厳しくなっています。不殺の話題がでないのはここで殺したから人に武器を向けるのが恐い、という言い訳をするためですね。色々本編に差し支える内容なので公開する予定は無く、水増し用として使わせてもらう事にしました。

さてここまでは文章の水増し分。

本題は少しだけ自己解釈に不安があるので、雪片式型について説明させていだきたいのです。

接近戦用ブレード雪片式型

白式の装備する近接専用ブレード。実体剣としての機能と、エネルギーブレードとしての機能の二面性を持つハイブリッドな武器である。

主な機能はエネルギーの消滅で、ビームなどの流動的なエネルギーは実体剣のままでも無効化する事ができる。もちろんこのときエネルギーは消費しない。そしてエネルギーブレードを展開する事で固定化されたエネルギー（シールドバリアなど）を無効化する事もできる。ただしエネルギーブレード展開中は常にエネルギーを消費する。

操縦者の状態が最高になったとき発動する零落白夜機能は一回の攻撃だけで相手のエネルギーを強制的にゼロにする。という機能がある。ほとんど触れるだけで相手のエネルギーをゼロにしてしまうため、振り切るのが遅れると、絶対防御が発動せずオーバーキルしてしまう危険がある。

もつとも、振り切るのが遅れるような状態ではそもそも操縦者の状態が最高とはいいがたく、零落白夜が発動するとも思えないが。

つまりシールドバリアをガンダムSEEDのPS装甲だとすると、実体剣状態はビーム刃を出していないシュベルトゲバール。

エネルギーブレード展開状態がビーム刃を展開したシュベルトゲバールという事ですな。

零落白夜は・・・アストレイゴルドフレーム天の『マガノイクタチ』でしょうか。

今後雪片式型や零落白夜に関して描写するときはこの設定で描写させてください。

更に水増しして、今後話題に上らないであろう設定をば。

『sikuy』

『雪片サポート（ユキサポ>yukisapo）』を略してひっくり返しただけです。

白式の持つ武装の説明をする機能と、ギリギリ見えるか見えないかのワイヤーフレームで球を描き、無意識にそれを見て『当たらない』と思つた一夏の意識を『エネルギーブレード展開するな』という命令に誤認させる機能の二つの機能があります。

人工知能とかではありません。

ちなみに織斑先生は後者の機能を漠然とですが見抜いています。

『s y l f』

『飛行サポート(フライサポート>f r y s a p o)』の頭四文字をひっくり返しただけです。

進行方向のシールドバリアに大質量を感知した場合、一夏の恐怖を『緊急停止命令』に誤認させるという機能です。

一夏の恐怖の理由の区別など全くつかないので実はシチュエーションによつては致命的な欠陥プログラムです。

『. s
| w
』

これらのソフトの拡張子です。『. a p o』『. n i s e』等と迷いましたがこれにしました。

流れがあるので項目を用意しましたが、最終的に明かされるだろう秘密の力ギなので由来は書きません。

まあたいした秘密でもないですが、もしわかったらメッセとかでおしえてくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7064x/>

燃え尽きた翼は宇宙へ駆け上がる夢を見るか

2011年12月7日22時52分発行